

例題本意『和文独訳の実際』

(Praxis der Übersetzung aus dem Japanischen ins Deutsche)

関口存男著 (東京 三修社版)

[22] 内容挙述の an

彼等の鹵獲[ろかく]せる武器、弾薬、馬匹[ばひつ]の数は莫大だった。
Ihre Beute an Waffen, Munition und Pferden war sehr groß.

an は、「云々の範囲に於ける」「云々の点での」等を意味するところから、その最も普通な型として、或る名詞の内容を規定するに用いられるのがある。日本語の感じから考えると、一寸 von でも用いそうなところである。また或種の場合には-----個々のものを単なる材料と見ないで、各々個性を備えたものと見る時等には-----von を用いたり、二格を用いたりすることもあるが、上例の如く、弾薬、武器、馬匹などの場合には、それら全部を Beute なる一語で先ず表わしてある位であるから、それらを単に「量」としてのみ問題になる概念と見なして an を用いるのである。故に an の後の語は必ず無冠詞である。

以下に最もよく用いられる結合を二三挙げて見る。Beute an.....等、an の前に来る名詞の主なものを記憶しておくことが必要である。

Bedarf an.....の需要	Bedürfnis an.....の需要、必要
Mangel an.....の欠乏	Reichtum an.....の豊富さ
Armut an.....の貧弱さ	Gewinn an.....の利得
Verlust an.....の損失	Vorrat an.....の持ち合わせ
Besitz an.....の所有	Verbrauch an.....の費消
Überfluss an.....の余裕	Überschuss an.....の過剰、剰余
Rest an.....の残余	Bestände an.....の現存高
Aufwand an.....の費消		

以上は名詞に附加される an.....であるが、それらの名詞が動詞になっても好いわけで、es fehlt an etwas (云々が欠けている)、es mangelt an etwas (同上[左])、an etwas gewinnen (云々を獲得する、儲ける)、an etwas verlieren (云々を損失する)等はすべて成句をなしている。また形容詞のこともある。reich an Regen (雨に富む) arm an Ereignissen (事件に乏しい)。

an だけを特に用いると、最初に挙げたような「云々の点では」の意味になる。

Er wollte an Edelmüt nicht hinter mir zurückstehen.

彼は高潔なる心事という点で私に一籌[いっちゅう]を輸[ゆ]することを欲しなかった。

これが、まず諸種の数量規定(mehr, weniger 等)と共に用いられたために、本項の如き用法が生じたのである。

Dieses Jahr sah mehr an Gewalttät und Verbrechen als irgend vorher oder später.

此の年に於いて行われたる暴力行為と犯罪の数は此の年以前及び以後に於いて絶対にその例を見ざるところである。

[備考] an を was と共に用いる場合に就いては次の[23]を見よ。

例題

1. 集会 (Versammlung) の数が非常に多く、且つ弁士 (Redner) を多数要する (der große Bedarf) ので (mit sich bringen, dass.....; zur Folge haben, dass.....)、これらの催し

(Veranstaltung)の大多数(ein erheblicher Teil)は、殆ど信ず可からざるほどの低い(tief)水準(Niveau, n.)に立っている。

Die große Zahl der Versammlungen und der große Bedarf an Rednern hat zur Folge, dass ein erheblicher Teil dieser Veranstaltungen auf einem fast unglaublich tiefen Niveau steht.

2. 家は古くて役には立たぬ(untauglich)が、まあできるだけよく設備をし(einrichten)て人に貸し(vermieten)、後日(später)家賃(Mietgelder; Mietzinse)の方の年々の(jährlich)剰余(Überfluss, m.)が私の子供たちにささやかな生計(ein bescheidenes Auskommen)を保証(versichern)するように(dass)して置こう。

Das Haus ist alt und untauglich, aber ich will es so gut einrichten und vermieten wie ich kann, dass später ein jährlicher Überfluss an Mietgliedern meinen Kindern ein bescheidenes Auskommen sichert.

3. 国際的経済危機とその随伴現象(Begleiterscheinungen)は決して一夜のうちに(über Nacht)やって来(einbrechen)たりなぞ(etwa)したものではなく、諸種の方面から(von dieser oder jener Seite)非常な宣伝さわぎで(mit großem Aufwand an.....)提議(anbieten)されつつあるような、諸種の故障(Notstände)の除去のための万能薬(Allheilmittel, n.)があるわけではないのである。

Die internationale Wirtschaftskrise und ihre Begleiterscheinungen sind nicht etwa über Nacht hereingebrochen und es gibt keine Allheilmittel zur Beseitigung der Notstände, wie sie von dieser oder jener Seite mit großem Aufwand an Propaganda angeboten werden.

4. 遊覧船(Ausflugsdampfer, m.)「やまぶき丸」上に於ける災害を取り調べ(prüfen)つつある調査員一行(Untersuchungskommission)は、一先ず(zunächst)その調査(Ermittlungen)を打ち切った(abschließen)。爆発(Explosion, f.)は恐らく(vermutlich)注意(Vorsicht, f.)が足りなかった事(Mangel, m.)の結果である(ist auf **IV** . zurückzuführen)らしい。

Die Untersuchungskommission, die das Unglück auf dem Ausflugsdampfer Yamabukimaru prüft, hat ihre Ermittlungen zunächst abgeschlossen. Die Explosion soll vermutlich auf einen Mangel an Vorsicht zurückzuführen sein.

5. 弧光鍛接[ここうたんせつ](Lichtbogenschweißung)の応用(Benutzung; Anwendung)によって達成(erzielen)された非常な(erheblich)材料(Material, n.)の節減(Ersparnisse)の結果(mit sich bringen, dass.....)、鍛接というものが非常に短时日の中に諸種の方面(Gebiet, n.)に於いて(auf **III** .)大々的に(in großem Maße)利用される(Eingang finden; eingeführt werden)に至った。

Erhebliche Ersparnisse an Material, die durch Benutzung der Lichtbogenschweißung erzielt werden, brachten es mit sich, dass die Schweißung innerhalb ganz kurzer Zeit auf verschiedenen Gebieten in großem Maße Eingang fand.

6. 政府軍(Truppen, pl.)によって包囲(umzingeln)されている兵匪(Banditen, pl.)はなお頑強な抵抗を試みて(energischen Widerstand leisten)はいるが(zwar)、彼等は大した弾薬(Munition)の持ち合わせ(Vorrat, m.)がない(mit sich schleppen; mit sich führenをう)から、早晚(früh oder spät)投降(sich ergeben)しなければならなからう。

Die von den Regierungstruppen umzingelten Banditen leisten zwar noch energischen Widerstand, aber sie werden sich früh oder spät ergeben müssen, weil sie keinen großen Vorrat an Munition mit sich führen.

[23] was.....an (von)..... の構造

顕微鏡で見ると、一滴の水の中に如何に多くの黴菌[ばいきん]がいるかがわかる。
Das Vergrößerungsglas zeigt, was so ein einziger Wassertropfen an Bazillen in sich birgt.

前項の、内容挙述の an の用法の中で、語順その他の点で特に注意を要するのが was と共に用いられる an である。

此の was は、どんな意味の was でもよろしい。即ち、本当の疑問詞の was でもよし、また関係代名詞の was でもよし、また疑問詞 was の次にそれに導かれる従属文が来る時でも宜しい。(もっとも第二と第三との間にはそうはっきりした境界が存する訳ではない。)

此の型を以て独訳するのに最も適しているのは、「凡そ云々する限りの.....」と云ったような概念である。いずれにしても、内容挙述の an であるから、an の次には、何か主として「量」としてのみ問題になるような語が来なければならない。たとえ Trauer, Freude, Zorn 其の他の、一見数量に関係の無いような純抽象名詞が来るにしても、それは其の際「量」としてのみ問題になるのであるから、第一決して冠詞を附けない。これは前項の場合と同様である。

Was ihm noch an Mut zurückgeblieben ist(彼になお残れる限りの勇氣)等の構造を取るのが普通であるが、此の際の an が呑み込めるように直訳するとすれば、「凡そ勇氣として彼になお残れるものは」とでも云うの外はなかろう。an Mut が「勇氣という点で」「勇氣に関して」等を意味するところにも前項にのべた an と同じである。

Was gibt es Neues in der Politik?

時には全然 an を省いて、was と Neues とを同格的に対立せしめて用いることがある。それは Neues, Gutes, Interessantes 等、形容詞から造った中性名詞に限る。etwas Neues, etwas Gutes 等と言って etwas an Neuem, Nichts an Gutem, viel an Interessantem とは云わないのも、之れと同じ型に属するからである。

但し was と Neues 等とが分かれてしまう時には was.....an Neuem 等と云っても決して間違いであるとは云われない。或種の長い文になると、むしろそうした方がはっきりして好いことがある。要するに、量が問題になる時には an を用いた方が宜しいので、Was gibt es Neues?等の際は、量というよりはむしろ「質」の方が問題になるので、was.....an Neuem とは多少考え方がちがわなければならない筈である。-----けれども要するに形容詞から来る中性名詞の際には、此の二法があることを覚えておく可きである。

量ではなく、質と種類が問題になる時で、しかも Neues なぞではなく、Mann, Tier, Ding 等普通の名詞が来る時に für を用いることは殊更断るまでもなかろうと思う。(Was ist das für ein Tier?等。)

an の代わりに von を用いる事もある

an の代わりに von を用いるのは極く自然で、この方は極く分かり易いと思うから、単に数例をあげておく。

- [1] Alles, was wir von Not und Trübsal erfahren haben, steht in diesem Buch.
- [2] Du fragst dich umsonst, was von List und Trug dahinter liegt.
- [3] Was man von begangenen Übeltaten und Greulichkeiten erzählt, ist alles erfunden.

例題

1. 凡ゆる正真正銘の(echt)信仰運動(Glaubensbewegung)の特徴(das Charakteristische)は、それがただ徐々(langsam)にしか成功(Erfolge haben)しないのが常だ(pflegen)という点である。凡そ或る時代に於いて発生する真に(wirklich)新しきものは、漸々に(allmählich)血路を拓く(sich Bahn brechen)ものである。

Das Charakteristische aller echten Glaubensbewegungen ist, dass sie nur langsam Erfolge zu haben pflegen. Was an wirklich Neuem in einer Zeit entsteht, bricht sich nur allmählich Bahn.

2. 共産的団体(Gemeinwesen, n.)に在っては、土地(Grundstück, n.)、器物(Gerät, n.)、道具(Werkzeug, n.)等が団体(Gemeinschaft, f.)に属するのみならず、また食糧(Nahrung, f.)衣服(Kleidung, f.)等の幾莫(was)が各個人(jeder einzelne)に属する(zukommen)かをも亦団体が規定するのである。

In einem kommunistischen Gemeinwesen gehören nicht nur die Grundstücke, Geräte, Werkzeuge usw. der Gemeinschaft, sondern die Gemeinschaft bestimmt auch, was jedem einzelnen an Nahrung, Kleidung usw. zukommt.

3. 此の共産党的無政府的運動に於いては、人類の最下級が有史以来(seit Menschengedenken)蒙っ(erleiden)た限りの虐待(Misshandlung)と屈辱(Schmach, f.)と侮蔑(Verachtung, f.)とがその鬱を晴らす(zu seiner Rechnung kommen; seine Rechnung finden)うとしているのである。

In dieser kommunistisch-anarchistischen Bewegung sucht alles das seine Rechnung zu finden, was die unterste Klasse der Menschheit seit Menschengedenken an Misshandlung, Schmach und Verachtung erlitten hat.

4. これらの飲食店(Wirtshaus, n.; Lokal, n.)の店主(Wirt, m. Inhaber, m.)は非常に狡猾で、人をとても詳しく(aufs Haar)観察している。彼等のところへやって来る人たちがどれだけお金を持っ(bei sich haben)ているかという事を最初の一目(auf den ersten Blick)で見抜(etwas heraushaben)いてしまって、その人々に、それに相当するだけの(dementsprechend)待遇(Behandlung)を与える(einem etwas angedeihen lassen)。

Die Wirte dieser Lokale sind sehr schlau und beobachten die Leute aufs Haar. Sie haben auf den ersten Blick heraus, was diejenigen, die zu ihnen kommen, an Geld bei sich haben und lassen ihnen die dementsprechende Behandlung angedeihen.

5. 自分自身の家が火事で焼け(abbrennen)るとか、地震(Erdbeben, n.)で毀れるとか、その他(oder sonst)何等かの不幸のために壊滅したような時には、そういう時に始めて本当に(erst recht)なんでもない一寸した住宅(so ein kleines Wohnhaus)が吾人に将[はた]して幾莫の労作(Müh und Arbeit)を費やさせた(es kostet einen etwas)ものかということがわかるものである。

Wenn sein eigenes Haus abgebrannt, durch das Erdbeben zerstört oder sonst durch ein Unglück zugrunde gegangen ist, dann erkennt man erst recht, was so ein kleines Wohnhaus einen an Müh und Arbeit gekostet hat.

6. 戦争年間(Kriegsjahre)がもたらした凡ての苦痛と窮乏(Entbehrung)は、我々に取って全然無意味(無用 unnützlich)なものであってはならない。それは、就中(vor allem)、みずから統治する(regieren)ことなくして、少数の『指導者』(Führer)によってみずからを統治せしめて置く国民はどんな目に遭う(es ergeht jemandem so und so)かという教訓(Lehre, f.)として役立て(zu etwas gereichen)なければならない。

Alles, was die Kriegsjahre an Schmerz und Entbehrung gebracht haben, soll uns nicht ganz unnütz sein, sondern vor allem zur Lehre gereichen, wie es einem Volke ergeht, das nicht sich selbst regiert, sondern sich von einigen wenigen "Führern" regieren lässt.

[24] 性質を指す an.

あいつには癪に触る点が多々ある。Es ist vieles an ihm, was mich ärgert.

人間の場合には、in と an とを比較して見ると、in ihm と云うと、彼という人間の人格の内部、又はその心の裡であって、表からは普通見えないものとして考える時に用いる。an ihm と云うと、彼に「附いているもの」彼の「帯びているもの」、要するに彼の「表面」に附着して、外部から見ると彼の外包をなし、彼を外に向かって表わしているところのもの、即ち彼の「性質」を指すことになる。但し an だからと云って決して彼の外部からやって来て彼の表面に附着した、謂わば彼の内面には何の関係もない表面的性質を指すと云う訳ではなくて、内部から生えて出て、直ちに以て其の人間を表わしているような、その本質に関する性質でも好いわけで、要するに、何でもよろしい、「性質一般」を指すのに此の an が用いられる。

だから、日本語では、「性質」という名詞が特に用いてある時でも、ドイツ語では、此の an を巧みに使い消化しさえすれば、Eigenschaft, Natur, Beschaffenheit 等の名詞を用いないで表現することが出来る。たとえば-----

[1] 私が彼の性質として感心するのは(或いは、彼について一つ感心すべき性質は)これを訳するには、ただ、「私が彼に就いて(an)感心するのは」と考えれば好い。即ち Was ich an ihm bewundern muss となる。

[2] Versuche deine Pflicht zu tun, und du weißt gleich, was an dir ist. (Goethe)
これを和訳するには、「汝の義務を果たさんと試みよ、然らば汝は汝に於いて何があるかを直ちに知らん」では一寸日本語にならない。「汝に果たして如何なる性質がかくれているかを」なぞと云い廻す必要がある。

以下の例題にも、たとえ性質という語が用いてあっても、それを an で表現するように試みてほしい。

此の an は必ず三格支配である。

例題

[1] 此の男にも、少なくとも一つだけは感心(bewundern)し且つ高く買(hochschätzen)わなければならない点がある、というのは即ち、彼の絶倫なる精力(Unverwüstlichkeit)である。わたくしはかれを二十年以来知っているが(kennen は現在、現在完了、いずれも可)、今だ曾てかれが疲れたり、だれたり(abgespannt)したのを見たことがない。

An diesem Menschen muss man wenigstens eines bewundern und hochschätzen, das ist seine Unverwüstlichkeit. Ich habe ihn nun schon zwanzig Jahre gekannt, aber noch nie habe ich ihn müde und abgespannt gesehen.

[2] 人は他人を何時も己自身に従って(nach)判断する(beurteilen)。この事は単に吾人が他人に彼等の持っていない性質を持たせて考える(einem etw. zuschreiben)場合に於いて云える(von [oder für] etwas gelten)のみならず、また全然別な意味に於いても云い得るのである。即ち、人は自分自身の性質として憎む(verabscheuen)ところの事柄を、また他人の性質としても憎悪(hassen)するのである。

Man beurteilt die anderen stets nach sich selbst. Das gilt nicht nur von den Fällen, wo man den andern Eigenschaften zuschreibt, die sie nicht haben, sondern auch in einem ganz andern Sinne: Alles, was man an sich selbst verabscheut, hasst man auch an den anderen .

[3] 一人の芸術家が他の芸術家に於いて非難するところの事柄は、後者(*der letztere*)の不完全なる(*unvollkommen; schlecht*)性質(*Eigenschaft*)や前者(*der erstere*)の間違った(*falsch*)判断(*Urteil, n. Beurteilung*)等(*etwa*)に在る(*in etwas liegen*)には非ずして、ただ専ら(*lediglich*)時と感じ方(*Empfindungsweise*)との発展(*Entwicklung*)に対する(*zu*)異なつた(*verschieden, ander*)立場の取り方(*Stellungnahme, f.*)の結果と観るべきである(*auf etw. zurückzuführen sein*)。

Vieles, was ein Künstler an dem andern tadelt, liegt nicht etwa in den schlechten Eigenschaften des letzteren oder dem falschen Urteil des ersteren, sondern ist lediglich auf eine andere Stellungnahme zu der Entwicklung der Zeit und der Empfindungsweise zurückzuführen.

[4] 廃[や]め(*beseitigen*)てはならない、むしろ安心して存して(*beibehalten*)も構わない、否むしろ性質として培養して行(*kultivieren*)かなければならない欠陥(*Mängel; Fehler*)というものがある。それは、他人を傷つけ(*verletzen*)るといふよりはむしろ他人に好感を与える(*einen angenehm berühren; einem schmeicheln*)ような欠陥である。

Es gibt Mängel, die wir nicht beseitigen, sondern getrost beibehalten dürfen, ja sogar an uns kultivieren sollen. Das sind solche, die den andern eher schmeicheln, als sie verletzen.

[5] 或る方面の(*in einer Sache; auf einem Gebiet*)通人(*Kenner*)であるということは、必ずしも(*nicht gerade; gerade kein*)幸いなことではない。通人は何を見ても何か苦情を云う(*aussetzen*)点がある、そして、それがつまり(*das.....eben*)、元来(*sonst*)吾人がそれに就いて(*daran; davon*)持てる筈の、否本当は(*eigentlich*)持つべき筈(*sollte*)の楽しみ(*Genuss*)を打ち毀す(*verderben*)からである。

Es ist gerade kein Glück, Kenner in einer Sache zu sein. Der Kenner hat an allem etwas auszusetzen, und das verdirbt eben den Genuss, den man sonst davon haben könnte, ja eigentlich haben sollte.

[6] 一つの学説(*Theorie; Lehre*)の性質として、それが反駁の隙を持っている(*widerlegbar*)ということは、結局(*schließlich*)その学説の馬鹿にできない(*nicht geringst*)魅力(*Reiz, m.*)である。とりも直さず(*gerade*)それによって其の学説は頭の好い人たち(*feinere Köpfe*)を惹きつけ(*anziehen*)、彼等が依つて以て(*womit*)己自身を完成する(*ausbilden*)ことのできるところの材料(*Material; Stoffe, pl.*)を彼等に供給する(*liefern*)のである。

An einer Theorie ist es schließlich nicht ihr geringster Reiz, dass sie widerlegbar ist: gerade dadurch zieht sie feinere Köpfe an und liefert ihnen Stoffe, woran sie sich ausbilden können.

[25] 狙う目標の *auf*.

首相を狙いて果たさず。Ein misslungener *Anschlag auf* den Ministerpräsidenten.

auf と四格は具体的空間的に用いると、或る物の表面又は上部に向かつてする運動を指すのであるが、もう-----*Er schlägt auf mich los.* 彼は私を目がけて打って掛かる。

となると、単なる運動の目標という以外に、多少抽象的的な「目標」即ち、これぞと目ざした、意志の向かう先の目標を表わしかかっている。これが発達したのが、抽象的な意味に於ける目標の *auf* である。以下に主なものを挙げて見ると-----

形容詞を基礎とするもの

auf etwas bedachtを心掛けた、目ざした
auf etwas erpichtを狙った
auf etwas versessenに夢中になった
auf etwas gespanntに全注意を向けた
auf etwas eingerichtet向きにしつらえた
auf etwas eingestelltにピントを合わせた、.....向きの
auf etwas abgerichtet向きに仕込まれた
auf etwas zugeschnitten向きの
auf etwas aufmerksamに注意せる
auf etwas berechnetを当て込んだ

動詞を基礎とせるもの

auf etwas lenken (richten, zuwenden)に向ける
auf etwas wartenを期待する
auf etwas abzielenを狙う
auf etwas anspielenをあてにする
auf etwas lauernを待ち構える
auf etwas hoffenをあてにする
auf etwas rechnenをあてにする
auf etwas lauschenに耳を敬[そばだ]てる
auf etwas deuten (zeigen, weisen)を指す
sich auf etwas vorbereitenの準備をする
sich auf etwas verlegenに夢中になる

以上を一覧すればわかる通り、これらの熟語に共通な **auf** の概念は、とにかく何か自分の「注意を向け」「気を奪」われる方向乃至目標と云ったようなものが問題になりその目標に **auf** をつけるわけである。四格支配の、抽象的な **auf** には此の型が一番多い。

この型の **auf** が、如何にはっきりと目標の意を有するに至ったかは、或種の、目標を必要とする動作を指す名詞の次には必ず **auf** でもってその対象を云い表わす事実を以てもわかる。以下その数例をあげると-----

Der Anschlag auf.....に対する陰謀
Der Überfall auf.....に対する襲撃
Der Rauschüberfall auf.....に対する略奪行為
Die Forderung auf.....に対する要求
Der Anspruch auf.....に対する権利主張
Die Aussicht auf.....の見込み
Die Hoffnung auf.....の見込み
Die Anspielung auf.....をほのめかす事
Die Spottverse auf.....に対する風刺詩

これらの名詞は必ず凡てが **auf** 支配の動詞から来たものではなく、**Überfall** に対する **überfallen** は **Ein Straßenräuber überfiel ihn** 等、四格を要求するなど、各々がった用い方をするものがあるが、名詞として他の名詞と結びつける際には、前置詞を以てはっきりと目標を表わす必要があるから **auf** を用いるのである。一たいに名詞を多く用いる論文にあっては、前置詞の機能が非常に重要になって来る

以下に多少の訳例を示しておく。

- [1] 彼は私のすることに何か滑稽な点がありはせぬかと、それを発見する機会を狙っている。
Er lauert auf die Gelegenheit, etwas Lächerliches in meinem Tun zu entdecken.
- [2] これから愈々どうなるか、私は刮目して待っている。
Ich bin aufs höchste darauf gespannt, was nun herauskommt
[oder wie das nun wird ; wo es nun hinauslaufen wird.]
- [3] 彼は当時或種の狂じみた考えに夢中になっていた。
Er war damals auf gewisse vertrackte Ideen versessen.

例題

1. 斯う云う風に (so) 全然 (ganz) 大衆的効果 (Massenwirkung) を目標としている新聞 (Blatt, n.) は、常に新たなセンセーション (Sensation) を狙っていなければならない、何故と云うに、大衆 (der große Haufen; das breite Publikum) は遺憾ながら (leider) 知識欲旺盛 (wissbegierig) ではなく、むしろただ好奇心が旺盛 (neugierig) なだけで、何か異状な (ungewöhnlich)、意外な (überraschend) ものを待っているからである。

Ein Blatt, das so ganz auf die Massenwirkung eingestellt ist, muss immer auf neue Sensationen bedacht sein, denn der große Haufen ist leider nicht wissbegierig, sondern nur neugierig, und wartet auf etwas Ungewöhnliches, Überraschendes.

2. 労働時間 (Arbeitszeit) の一般的短縮 (Verkürzung) 時間外の労働 (Überarbeit) の廃止 (Beseitigung, Abschaffung) 及び二重儲け (Doppelverdienertum, n.) の断乎たる排除 (ernsthafte Bekämpfung) に関する職工組合 (Gewerkschaft) の要求 (Erforderung) は、ただ政府の此れ等の処置 (Maßnahmen) の遂行 (Durchführung) に対する断乎たる (entschlossen) 決心 (Willen, m.) を求める (erfordern) に過ぎない。

Die Forderungen der Gewerkschaften auf allgemeine Verkürzung der Arbeitszeit, auf Beseitigung der Überarbeit und auf ernsthafte Bekämpfung des Doppelverdienertums erfordern nur den entschlossenen Willen der Regierung zur Durchführung dieser Maßnahmen.

3. 現存する (heute bestehen) 経済上の複雑化 (Differenzierung) を大々的に (weitgehend) 撤廃する事 (Beseitigung) を目指している斯くの如き過激なる (radikal) 種類の計画を真剣に (ernst) 考察 (Betrachtung) の対象 (Gegenstand, m.) にするという事は、抑々 (überhaupt) 科学の能事 (es kommt einem zu, etwas zu tun) であろうか？

Kommt es der Wissenschaft überhaupt zu, Pläne so radikaler Art, die auf eine so weitgehende Beseitigung der heute bestehenden wirtschaftlichen Differenzierung abzielen, zum Gegenstand ernster Betrachtungen zu machen?

4. 常に (stets) 己自身の幸福を心掛けているという事に依っては、吾人はむしろ其の反動に達する (etwas erreichen) ものである。総ての人間が自分自身を共同団体 (Gemeinschaft, f.) として、否一家庭として感じなければならない。凡ての配慮 (Sinnen, n.) を共同団体の上に向けて始めて己自身の幸福をも実現 (erzielen) することができるのである。

Dadurch, dass man stets auf sein eigenes Glück bedacht ist, erreicht man vielmehr das Gegenteil. Alle sollen sich als eine Gemeinschaft, ja eine Familie fühlen ; nur wenn man alles Sinnen auf die Gemeinschaft lenkt, erzielt man auch sein eigenes Glück.

5. 彼は生まれながらの (geboren) 役者である。彼は偉人ではなく、ただそう見られ (scheinen) たいと思うきりで、それが一切なのである。彼の言葉、挙動 (Gesten, pl.) の中

には、何か斯うわざとらしい(absichtsvoll)偽りだらけ(lügnerisch)なところがあり、人に与える印象に対する浅墓な(eitel)打算(Berechnung)がある。

Er ist ein geborener Schauspieler. Er ist kein großer Mann, sondern er will es nur scheinen, das ist alles. In seinen Worten und Gesten liegt etwas Absichtsvolles und Lügnerisches, eine eitle Berechnung auf den Eindruck.

6. これは(das)近頃の(von heute)大抵の若い人達、殊に(besonders; vor allem)知識欲に燃えた大学生(Universitätsstudent)たちの典型的な過ちであるが、(dass)彼等は、彼等の努力の全部(all ihr Fleiß)を、彼等の気持ちにじっくりした(einer fühlt sich wo zu Hause)一つの範囲(Kreis, m.)に集中(konzentrieren)することが出来ない。

Das ist der typische Fehler bei den meisten jungen Menschen von heute, besonders bei den wissbegierigen Universitätsstudenten, dass sie all ihr Fleiß nicht auf einen Kreis konzentrieren können, in dem sie sich zu Hause fühlen.

[26] 吟味の際の着眼点を意味する auf.

試みに渠[かれ]の主張を取って其の真偽を検せん。
Wollen wir seine Behauptung auf ihre Wahrheit [hin] prüfen.

prüfen 検べる、untersuchen 検べる、ansehen 観察する、erkennen 判断する、beurteilen 判断する、betrachten 考察する、zergliedern 分解する、sezieren 解剖する、kritisieren 批評する、その他とにかく或る物を扱って「其の云々なるや如何」を検しつつ行う動作には、その「云々なるや如何」と云う点、即ち吟味の際の着眼点を云い表わすのに此の auf.....または auf.....hin という形式を用いる。

たとえば、「一つの金貨を取ってその金の含有分量を検する」又は「一つの金貨の金の含量を検する」ならば ein Goldstück auf seinen Goldprozentsatz [hin] prüfen である。hin は、ある方がはっきりするが、必ずしも無くてはならないと云うのではない。

なお此の auf をはっきり首肯するために、少し厄介な論文の一個所を研究して見よう。

Zunächst ist dadurch überhaupt erst der Boden geschaffen, auf dem die phänomenologische Analyse ansetzen und unbeschränkt sich bewegen kann, da sie nunmehr das Dasein als ein in sich fast bestimmtes Phänomen im Blick hat, das auf seinen inneren Aufbau hin zu zergliedern, bis ins Fundament freizulegen und so in seiner "Möglichkeit" zu begreifen ist. (Georg Misch: Lebensphilosophie und phänomenologie.)

「まずさしあたり、そうする事によって始めて、現象学的分析を開始する事が出来ると同時に、左様な分析を自由に行い得るところの基礎が創られたわけである。如何となれば、そういう分析を行うに際しては、存在なるものに対し、その内的構造を知らんがために分析し、その根柢に到るまで啓開し、その『可能性』を理解すべき、一つのそれ自身に於いて殆ど輪廓を有すると云っても好い程の現象として注目を向けるからである。」

上例でわかるとおり、少し意味が厄介になって来ると、こうした形式を形式としてはっきりと自信を以ておぼえて置かないと意味がとれない。

auf.....hin に三種あり

以上は、意味の上から出立して、斯う云う意味の時には auf 又は auf.....hin を用いる、という話をしたのであって、auf.....hin が必ず吟味の際の着眼点を指すというのではない。

auf.....hin という形の点から出立して話すと、細かい移り変わりは別問題として、意味が大体三種ある。

[1] まず第一は、此の項にのべた吟味の際の着眼点を指すもの。

[2] その次は、「云々を基礎として」「云々を信じて」「云々を条件として」という auf-----hin.

Man soll niemand auf Petzerei hin bestrafen.

(告げ口を信じて人を罰してはいけない。)

Ich habe es auf Ihre Behauptung hin angenommen.

(私はあなたがそう仰言ったからそう思ったのです。)

Auf Autorität hin glauben ist naiv.(權威に拠って物を信ずるのは素人考えだ。)

[3] 「運を天に任せる」もしくはそれに似た意の熟語がある。出所は勿論一つ前の auf.....hin からである。

auf gut Glück

あてずっぽうに

aufs Geratewohl

でたらめに

auf die Gefahr hin

.....の危険を冒して

auf Tod und Leben

.....生死を省みず

auf Gnad' und Ungnad'

.....成敗を敵の裁量に任せて(投降する)

[備考] auf gut Glück 等は勿論形でも知れる通り成句であるが、これらが auf.....hin だということは auf gut Glück hin と云うから明瞭である。

例題

1. 目の肥えた (geübt) 観察者は、生粋の (echt) 江戸っ子 (Edokko, Tokioter) の区や町 (Stadtbezirk, m) まで見分け (erkennen) られるそうで、しかも (und zwar) 言葉つきで (an III.) ではなく、生粋の江戸っ子が地方色 (Lokalfarbe, f.) として両親から譲り受け (übernehmen) る或種の極くはっきりした (bestimmt) 何でもない (klein, unbedeutend, unscheinbar) 色合い (Nuance; Schattierung) で (an III.) わかるそうである。

Der geübte Beobachter kann den echten Tokioter auf den Stadtbezirk hin erkennen, und zwar nicht an der Sprache, sondern an ganz bestimmten kleinen Nuancen, die der echte "Edokko" als Lokalfarbe von seinen Eltern übernimmt.

2. 共産党的な思想 (Idee, f.) が這入って来て (Einführung; eingeführt werden) からというもの、マルクス主義から持ってきた (von.....Herkunft) 術語 (Ausdruck; Fachausdruck; jargon, m.) を振り廻し (mit etwas um sich werfen) て、何でもかでも先ずそれがマルクス主義的であるか非マルクス主義であるか、赤いか白いかという点を吟味し (prüfen) てかかるのが我が国では殆ど流行 (Mode) になってしまった。

Seit der Einführung der kommunistischen Idee ist es bei uns beinahe Mode geworden, mit Ausdrücken von marxistischer Herkunft um sich zu werfen, und alles erst darauf zu prüfen, ob es marxistisch oder unmarxistisch, ob es rot oder weiß ist.

3. 今度出た (neuerlassen) 法令が、何処に隙があるか (wo es schwach ist) とか、またはどうしたらそれをもっと良くやることが出来たろうか等と、コツキ廻して吟味 (beklopfen) する者があるとすれば、彼は屹度 (sicher, gewiss) かなり (genug) 文句の附け所のある (anfechtbar) 個所 (Stellen) を発見するに違いないだろう。しかしまあ大体に於いて (im ganzen) 該法令は無難 (gut; tragbar) である。

Wer das neuerlassene Gesetz daraufhin beklopft, wo es schwach ist oder wie man es noch besser hätte machen können, wird sicher genug anfechtbare Stellen finden. Aber im ganzen ist

das Gesetz tragbar.

4. 此の哲学者は、既に出来上がっている (fertig) 文献 (Leistung) の如何を考察する (ansehen) とすれば、それは如何にも (zwar) 他の偉大な思索家達に比べて遙かに見劣りがする (hinter jm. zurückstehen) かも知れないが、一たび彼の仕事を駆り立てて (treiben) いる力にまで乗り込んで (zu etw. vordringen) 生活の総体 (das Ganze) に対するその影響 (Einfluss auf) を追究 (verfolgen) する者は、彼をば最良の者達 (die Besten) の一人に加える (zugesellen) に相違ない。

Steht dieser Philosoph, auf die fertige Leistung angesehen, zwar hinter den anderen großen Denkern weit zurück, so wird ihn den Besten zugesellen, wer zu den seine Arbeit treibenden Kräften vordringt, und seinen Einfluss auf das Ganze des Lebens verfolgt.

5. 革命的な (umwälzend) 考えを最初に得た (bekommen) 瞬間には誰でも一寸おどろいて、殊に (namentlich) まだ年が若いと、そんな極端なことをやる (so weit gehen) のは空おそろしく感ずる (sich scheuen)。その考えが何度も何度も (mehrmals, immer wieder, mehrfach) 現われる (wiederkommen) に及んで始めて (erst wenn; erst dann; wenn) 勇気と自信 (Vertrauen, n.) を持ち (fassen) はじめ、その考えが実現可能であるか (Durchführbarkeit) どうかを真剣に (ernstlich) 考え (betrachten) るものである。

Wenn man einen umwälzenden Gedanken zum ersten Male bekommt, so ist man erschrocken, und scheut sich, so weit zu gehen, namentlich wenn man noch jung ist. Erst wenn der Gedanke mehrfach wiederkommt, beginnt man Mut und Vertrauen zu fassen und betrachtet ihn ernstlich auf seine Durchführbarkeit.

6. 最近数ヶ月間の発令 (Verordnung) 布達 (Kundgebung; Bekanntmachung) が将 [はた] して一般によくわかったかどうか (Allgemeinverständlichkeit) また信頼の念を起こさせる力があつたかどうか (ihre Vertrauen werbende Kraft) という点を検べ (ansehen) てみると、遺憾ながら、それらの発令布達にはかなり必要なこと (Nätigstes) が欠けていたと云わざるを得ないのである。

Wenn man sich die Verordnungen und Kundgebungen der letzten Monate auf ihre Allgemeinverständlichkeit und ihre Vertrauen werbende Kraft hin ansieht, dann muss man leider sagen, dass sie es an Nätigstem fehlen lassen.

[27] 限度の auf

株は原価の十倍にまで騰貴した。

Die Aktien stiegen auf das Zehnfache ihres ursprünglichen Wertes.

数字を以て諸種の程度、限度、水準、規準、総額等を指さなければならない動詞の大部分は、auf と四格を支配するのが普通である。

此の用法と、前項に挙げた auf の用法との関係は一見明瞭である。即ち、まず、注意を向けて狙いをつけるという auf が、その次には其の目標への到達を意味するようになり、(例えば Angesichts der zarten Farben ihres Gesichts hätte man nicht auf dreißig, sondern auf dreiundzwanzig geraten は geraten を raten の過去分詞と考えて始めて本項の auf の用法になるのであるが、geraten を geraten [陥る] と誤認しても全然意味をなさないではない、verfallen と考えても同じである。其の際の auf は「達する目標」を指す auf で、前項と此の項との中間現象である) -----それが数字の場合に用いられると此の項の如き用法をなすようになるのである。すべて四格支配の auf である。

これも、共に用いる主な動詞を覚えて置けば、類似の場合も従って判別されるようになる。

auf soundsoviel schätzen	幾莫と評価する
auf s. steigenに登る
auf s. beschränkenに制限する
sich auf s. beziffernの数字を示す
auf s. einschrumpfenに減ずる
auf s. wachsenに増す
auf s. ergänzenにまで補充する
sich auf s. belaufenに達する
auf s. sinkenに落ちる
auf s. anlaufenに達する
auf s. vermehrenに増加する

其の他、減るとか増すとか云う意味、見積もるとか制限するとかいう語と共に臨機応変に此の auf を用いて差し支えない。

[備考] この auf は bis auf とも云うことがある。(Die Summe lief bis auf 200 R.M. an.)

例題

1. 和蘭陀[オランダ]のライデン(Leiden)大学に於いて(an)数年前摂氏零下 271 度 9 分 (- 271, 9 Grad Celsius)の寒度(Kälte)を出す(erzeugen)ことが出来た。絶対零点(der absolute Nullpunkt)は零下 273 度の所に(bei)ある(liegt)。宇宙(Weltraum, m.)に支配している寒度は A. S. Eddington 教授によって零下 269 度 8 分と見積(schätzen)もられている。

An der Universität Leiden, in Holland, gelang es vor einigen Jahren, eine Kälte von minus 271, 9 Grad Celsius zu erzeugen. Der absolute Nullpunkt liegt bei minus 273 Grad. Die im Weltraum herrschende Kälte wird von Professor A. S. Eddington auf minus 269, 8 Grad geschätzt.

2. 我々が今までに(bislang)なしたところの凡てを考え合わせれば(etw. in Rechnung bringen)、1930 年の再選挙(Neuwahlen, pl.)後丁度(genau)100 名の党员(Mitglied, n.)を算し(zählen)ていた我が党が、109 名にまで力を伸べる(sich verstärken)ことが出来、それに反して(während)与党は 121 名から 108 名にまで減少(zusammenschrumpfen)したという事実を容易に理解することが出来る。

Wenn man alles, was wir bislang getan haben, in Rechnung bringt, so kann man leicht begreifen, dass unsere Fraktion, die nach den Neuwahlen von 1930 genau 100 Mitglieder zählte, sich auf 109 verstärken konnte, während die Regierungspartei von 121 auf 108 Mann zusammenschrumpfte.

3. 弁士(Redner)は軍国主義を財政的(finanziell)見地(Gesichtspunkt, m. Standpunkt, m.)からも批評(kritisieren)し、且つ世界の軍備支出(Rüstungsausgaben, pl.)は年々(jährlich)金馬克[きんマルク](Goldmark)200 億、即ち大戦以前に比して 70 割増(mehr)の数字を示している(sich beziffern)と述べた(mitteilen; feststellen)。

Der Redner kritisierte den Militarismus auch von dem finanziellen Standpunkte aus und stellte fest, dass die Rüstungsausgaben der Welt sich auf 20 Milliarden Goldmark jährlich beziffern, d. h. 70 Prozent mehr als vor dem Weltkrieg.

4. タルヂュウ(Tardieu)内閣(Kabinett, n.)は、昨年、凡ての従軍者(Kriegsteilnehmer)に対し、50 歳以後に於いて(vom 50. Lebensjahre ab)500 法[フラン](Frank, m. pl. --en)の恩給(Ehrensold, m.)を下附(zuerkennen)し、その恩給は 55 歳を過ぎると同時に(mit vollendetem 55. Jahre)自動的に(automatisch)1200 法に昇る(sich erhöhen)という法令

(Gesetz, n.) を通過させ (zur Annahme bringen) た。

Das Kabinett Tardieu hatte im vergangenen Jahre ein Gesetz zur Annahme gebracht, das jedem Kriegsteilnehmer vom 50. Lebensjahre ab einen Ehrensold von 500 Franken zuerkannte, der mit vollendetem 55. Jahre sich automatisch auf 1200 Franken erhöht.

5. 凡ゆる方面に於いて悲惨なる影響を惹起 (sich katastrophal auswirken) しつつある不景気 (schlechte Geschäftslage, f.) は、平素 (sonst) 讃嘆の的となっていた (vielgepriesen) 当商会 (Geschäft, n. Firma, f.) に於いて (bei) も亦全然影響 (Einfluss, m.) なしには済まなかった。今年度の欠損 (Defizit, n.) は、私の見たところ (nach meinen Schätzungen) 概ね (rund) 20 万円に達する (sich belaufen) かも知れない (dürfte)。

Die schlechte Geschäftslage, die sich auf allen Gebieten katastrophal auswirkt, ist auch bei unserem sonst vielgepriesenen Geschäft nicht ganz ohne Einfluss geblieben. Das Defizit in diesem Jahr dürfte sich nach meinen Schätzungen auf rund 200 tausend Yen belaufen.

6. もともと (ohnehin; von Haus aus) そう莫大 (beträchtlich) だとも云え (als sounso anzusprechen sein) ない彼の良民性 (Ehrlichkeit) は、もしかれに対して何等かの (irgendein; irgendwelcher) 形で、良い昼飯乃至晩飯が眼の前に見せつけられる (in Aussicht gestellt werden) や否や、ほんのチョッピリの (winzig; verschwindend klein) 最小限度 (Minimum, n. Mindestmaß, n.) にちぢかんでしまう (einschrumpfen)。

Seine Ehrlichkeit, die ohnehin nicht als beträchtlich anzusprechen ist, schrumpft, sobald ihm in irgendwelcher Form ein gutes Mittags- oder Abendessen in Aussicht gestellt wird, auf ein winziges Minimum ein.

[28] unter と 動作名詞

遂には青年団や鉱夫等の援助の下に山狩りを行うこととなった。

Nun wird sogar *unter Mitwirkung* des Jugendbundes und der Bergarbeiter zu einer Hetzjagd vorgegangen.

動作名詞 (*nomen actionis*) と云うのは、動詞と関係があつて、同時に動作そのものを意味する名詞である。たとえば *Mitwirkung* (協同、援助) は動作名詞であるが、*Wirkung* (結果) はそうではない。*Gewöhnung* (慣らすこと) は動作名詞であるが *Wohnung* (住宅) はそうではない。*-ung* の語尾が必ず *nomen actionis* であるとは云われない。たとえ *-en* の語尾と雖もそうで、たとえば *das Essen* (食事) *das Leben* (生命) 等、*nomen actionis* でないものが多々ある。それに反して、動詞の語幹のまま無語尾のものの中にも *nomen actionis* がある。たとえば *Hinweis* (指示) *Schutz* (保護) *Gruß* (挨拶) 等。また *-e* に終わる女性名詞もある。*Mithilfe* (援助) *Stellungnahme* (態度決定) 等。これらは習慣として *Mithelfung*, *Stellungnehmung* などとは云わない。

けれどもまあ大体に於いて一番多いのは *-ung* 語尾である。

斯うした *nomen actionis* と *unter* とを用いるというと、*indem man das und das tut* (斯々斯様の事をなしながら) または *indem andererseits das und das geschieht* (他方に於いて斯々斯様の事が行われつつ) といったようなことを簡単に句で表現することが出来る。

能動的 *unter*

たとえば、「自分の利害をも多少顧慮して」という句を訳しようと思ったら、もし之れを日本語の構造の通りにやれば

1. indem man auch seine eigenen Interessen gehörig berücksichtigt.

2. auch seine eigenen Interessen gehörig berücksichtigend.

なぞと云わなければなるまいが、こうした文章的構造を句に変え、動詞の代わりにそれに該当する *nomen actionis* を用いる時には *unter* を用いれば極く軽快にもなり、副文章や副文章の省略形を用いずにすむのである。

unter gehöriger Berücksichtigung seiner eigenen Interessen

受動的 *unter*

また、文の主語から見てその動作が受動的関係にある場合にも此の方法を用いることができる。たとえば「文化はブルジョワジーの眷顧の下に発達する」(*Die Kultur entwickelt sich unter Begünstigung der Bourgeoisie*)と云えば、*Begünstigung* は *Kultur* から見ると、受身の動作である。即ち *Kultur* が *Bourgeoisie* を *begünstigen* するのではなくて、*Bourgeoisie* に *begünstigen* される関係にあることは直ちに首肯し得るだろう。

受動的 *unter* に限って「.....の下に」という訳語があてはまる

こうした受動的な場合の *unter* には、丁度日本語でも「.....の下に」という訳語があてはまるが、前述の能動的 *unter* の場合には此の直訳があてはまらない。そのために、日本語を独訳する際にも、この便利な *unter* が巧くあてはまる場合をつい見逃し勝ちである。

冠詞は大抵省かれる

「.....云々しつつ」「.....云々の下に」は、意味の上からも語勢の上からも(また *unter* が *-er* という語尾を持っている関係からも来るのであるが)殆ど前置句(たとえば *in Bezug auf.....*, *im Namen des.....*, *zugunsten des.....*等)として感ぜられるが故に、前置句の大部分がそうであるように定冠詞を省いて副詞句化するのが普通である。但し、*nomen actionis* を殆ど一つの抽象名詞として考えんとする時には附けることもないではない。

unter dem Schutz der Artillerie 砲兵の掩護(射撃)の下に

unter を伴う句は随時に造って行くものではあるが、多少の具体的根拠を標準として置いた方が感じを養う上に都合が好いから、下にその数例を挙げる。

<i>unter Mithilfe des.....</i>の援助の中に
<i>unter Mitwirkung des.....</i>の協力の下に
<i>unter Begünstigung des.....</i>の保護の下に
<i>unter Bewachung des.....</i>の看視の下に
<i>unter Beeinflussung des.....</i>の影響の下に
<i>unter Vorlegung des.....</i>を提示して
<i>unter Berücksichtigung des.....</i>を顧慮して
<i>unter Zurateziehung des.....</i>を参考に
<i>unter Berufung auf.....</i>を盾に取って
<i>unter Hinweis auf.....</i>を援用して
<i>unter Zugrundelegung des.....</i>を基礎にして
<i>unter Ausschließung des.....</i>を除外して
<i>unter Benutzung des.....</i>を利用して
<i>unter Verwerfung des.....</i>を排して

例題

1. 今さっき電話で私に通知があった所によると、2月21日正午N. N. に於いて開催の予定の (für [又は auf].....geplant) 共産党 (die Kommunistische Partei) 大会 (Massenversammlung) に対し、警視総監 (Polizeipräsident) は政治的反則行為 (Ausschreitung) 防遏 [ぼうあつ] (Bekämpfung) に関する (zu) 緊急法令 (Notverordnung) を援用して (unter Hinweis auf) 禁止を命じた。

Wie mir soeben telephonisch mitgeteilt wird, hat der Polizeipräsident die für den 21. Februar Mittag 12 Uhr in N. N. geplante Massenversammlung der Kommunistischen Partei unter Hinweis auf die Notverordnung zur Bekämpfung politischer Ausschreitungen verboten.

2. 昨日のバワリア国民党 (Bayrische Volkspartei) 州委員会 (Landesausschuss, m.) 会議 (Tagung, f. Sitzung, f.) は、全州より集まった会衆の (aus dem ganzen Lande) 盛んな参加 (rege Beteiligung) の下に、Held 博士及び Leicht 博士が列席して (in Anwesenheit von) 行われた (stattfinden)。

Die gestrige Tagung des Landesausschusses der Bayrischen Volkspartei fand unter reger Beteiligung aus dem ganzen Lande und in Anwesenheit Dr. Helds und Dr. Leichts statt.

3. 最近 (jüngst, kürzlich) 物故 (scheiden) した工場主 (Fabrikbesitzer) の子息は、私が電報を打てば (auf meine telegraphische Nachricht)、こちらへ帰って来て、信憑す可き (authentisch) 書類 (Urkunde, f.) を提示 (Vorlegung) して父の (väterlich) 遺産 (Erbe, n. Erbschaft, Hinterlassenschaft) を受け取る (in Empfang nehmen) であろう。

Der Sohn des jüngst geschiedenen Fabrikbesitzers wird auf meine telegraphische Nachricht hierher zurückkommen, um sein väterliches Erbe unter Vorlegung authentischer Urkunden in Empfang zu nehmen.

4. トーキーにも興味を持っている (sich für etw. interessieren) 現代名短篇作家 (Novellist) の一人が目下 (zurzeit) 当会社のために、或る外国 (ausländisch) 小説を基礎にして (Zugrundelegung) 非常に面白い映画短篇 (Filmnovelle, f.) を書きつつある。

Einer der berühmtesten Novellisten unserer Zeit, der sich auch für den Tonfilm interessiert, schreibt zurzeit für unsere Gesellschaft unter Zugrundelegung eines ausländischen Romans eine sehr interessante Filmnovelle.

5. 若し或る国家が既存の (bestehend) 条約 (Vertrag, m.) 乃至協定 (Abmachung, Abkommen) を犯して (Verletzung) 他の国家の權益 (Gerechtsamen und Interessen) を危うくする (untergraben) ような試みをすれば、両国間にはかなり (recht) いやな (unliebsam) 紛糾 (Verwicklung) を惹起する (es führt zu etwas) 惧 [おそ] れがある。

Wenn ein Staat unter Verletzung bestehender Verträge oder Abmachungen die Gerechtsamen und Interessen eines anderen Staates zu untergraben versucht, dann kann es zu recht unliebsamen Verwicklungen zwischen beiden Staaten führen.

6. 明治 (die Ära Meiji) 初年 (die ersten Jahre) に英国憲法を参考 (Zurateziehung) し、我が国の特殊事情 (spezielle Verhältnisse) を考慮 (Berücksichtigung) して編纂 (abfassen) された日本の憲法 (Verfassung, Reichsverfassung) は、今や新たな憲法によって換置 (ersetzen) された。

Die alte japanische Reichsverfassung, die in den ersten Jahren der Ära Meiji unter Zurateziehung der englischen Verfassung und unter Berücksichtigung der speziellen Verhältnisse unseres Landes abgefasst worden ist, ist nunmehr durch eine neue ersetzt worden.

[29] 警戒の vor.

年は取っても浮気はやまぬ。Alter schützt vor Torheit nicht.

怖れる、警[いまし]める、畏敬する、護る、逡巡する、庇う、戦く、遁げる、助ける、用心する、飛びのく、退く、引退する、嘔吐を催す、.....と云ったような、何か「警戒すべき対称」が補足語として問題になるような種類の動詞は大抵 vor と三格を支配する。「敵を前に逃げる」「妖怪の前に怖れをなす」「火事の前に戒める」と云ったようなわけである。日本語的に考えると、うっかりすると四格支配にしそうであるが、四格支配とは一寸意味がちがう事があるから注意を要する。Alter schützt die Torheit nicht ならば、Torheit が Alter の保護を受けることになって、茲では意味をなさない事になる。

vor の補足語を取る動詞は大部分自動詞

vor の意味は、元来は勿論「の前に」「に臨んで」であるが、警戒の vor の場合には、むしろ「.....に対して」と云って意味の通ずる場合が多い。だから、たとえば Alter schützt vor Torheit に於ける schützen は、前に「他動詞の絶対用法」という題の下に研究した現象であって、つまり四格を省いて(入れるとすれば uns, einen, die Menschen 等)自動詞的になるわけである。従って schützt だけで、「守る」というよりはむしろ「予防手段となる」ということである。

他の例で云えば、「恐れる」は fürchten ならば他動詞故 er fürchtet mich というが、sich fürchten は「恐れをなす」「恐怖を感じる」という意の自動詞故、vor を支配して er fürchtet sich vor mir という。

以下に vor を支配する主なものを挙げると-----

sich vor etw. fürchtenを怖れる
vor etw. zittern, beben, erzittern, erbebenに戦慄する
vor etw. warnenを戒める
vor etw. weichenにたじろぐ
sich vor etw. in acht nehmenに用心する
vor etw. zurückschreckenに凹[へこ]たれる
vor etw. fliehenから遁げ去る
vor etw. bewahrenに対して護る
vor etw. schützenに対して守る
vor etwas Furcht habenに恐怖を感じる
vor etwas Achtung habenを尊敬する
es graut mir vor.....がおそろしい
vor etw. zagenに畏縮する
vor etw. rettenから助ける
sich vor etw. zurückziehenを避けて引き退る

従って、同様の意味の名詞を用いる際にも、「.....に対する」は vor である。

Die Furcht vor Ansteckung	伝染に対する恐怖
Die Warnung vor dem Sturm	嵐に対する警告
Der Ekel vor dem Laster	宿悪に対する嫌悪
Die Achtung vor den Büchern	書物に対する尊敬の念
Die Scheu vor der Wahrheit	真理に対する怯気[おぢけ]

また、とにかく如上のような意味の場合には随意に vor を用いてよろしい。次の例によって会得してもらいたい。

[1] Die Leute, die auf der Bank saßen, rückten *vor* dem neuen Ankömmling höflich zusammen.

ベンチに掛けていた人たちは、新たにやって来た此の男を見ると慇懃に席を譲って一所にかたまった。

[2] *Vor* dem Ratten haben wir endlich Ruhe im Graben. Sie sind vorn-----wir wissen, wozu. Sie werden fett. [*Remarque, Im Westen nichts Neues.*]

塹壕内の鼠だけはやっといなくなった。彼等は前線へ出かけて行ったのだ。そのわけはわかる。ふんだんに有りついているわけだ。

例 題

1. 吾人が世の中に於いて、また遺憾ながら吾人自身の中にすらも発見するところの凡ゆる分裂 (Zerrissenheit) 凡ゆる齟齬 (Widersprüche) に対しては只一つの救助 (Rettung, Ausweg) が存するのみである。個人生活の永遠の単純性 (Einfachheit)、それから、吾人が凡ゆる他の人間に対して一人の人間と結ぶ (schließen) ところの此の原始的 (primitiv) 攻守同盟 (Schutzbündnis, n.) たる夫婦関係 (die Ehe) がそれである。

Vor aller Zerrissenheit und allen Widersprüchen, die man in der Welt und leider auch in sich selbst findet, gibt es nur eine Rettung: die ewige Einfachheit des persönlichen Lebens, und die Ehe, dieses primitive Schutzbündnis, das man mit einem Menschen gegen alle anderen schließt.

2. 神が凡ゆる科学的探求 (Forschung) 凡ゆる哲学的反省 (Besinnung) に対して窺観 [きかん] を許さない (einem etwas vorenthalten) ことがらが無限 (eine unendliche Zahl von) にある。所謂「我等知らず、我等また知らざるべし」 (ignoramus, ignorabimus) である。けれども、我々が我等自身に対して掩い隠 (verhüllen) されてあるということは好い事だ。

Es gibt eine unendliche Zahl von Dingen, die Gott aller wissenschaftlichen Forschung und philosophischen Besinnung vorenthält. Ignoramus, ignorabimus. Aber es ist gut, dass wir vor uns selbst verhüllt sind.

3. 遭難 (havariert) 汽船 (Dampfer) 若狭丸より達したる再度の (neu, zweit) 無電 (Funkspruch, m.) によれば (besagen, dass.....) 若狭丸 [女性] は今なお嵐に対して手の下しようもなく (hilflos vor) 漂流 (dahintreiben) しつつあり、目下のところ (augenblicklich) 隠岐島を去る西方 (westlich II.---westlich von) 75 海里 (Seemeilen) の点にある (sich befinden) 由。

Ein neuer Funkspruch des havarierten Dampfers Wakasa besagt, dass die Wakasa noch immer hilflos vor dem Sturm dahintreibt und sich augenblicklich ungefähr 75 Seemeilen westlich der Oki-Insel befindet.

4. 私は凡てを篤 [とく] と考え肚 [はら] を決め (seinen Entschluss fassen) ましたから、もうどんな障害にも辟易 (vor etw. zurückschrecken) しません。貴君がおっしゃる心配 (was Sie mir zu bedenken geben) 等に至っては尚更 (am wenigsten) のことです。

Ich habe alles wohl überlegt und mein Entschluss ist gefasst. Ich schrecke vor keinem Hindernis zurück, am wenigsten vor dem allem, was Sie zu bedenken geben.

5. 自然界に於ける不気味なるもの (das Unheimliche)、不可解なるもの (das Unbegreifliche) が人類を根本的に (tiefgehend) 主観的 (subjektiv) になした、そして此の気持からして宗教が生じた (hervorgehen) のである。[関係代名詞でつなぐ] だから宗教は外的 (äußer) 自然威力 (Naturgewalten, pl.) に対する内的 (inner) 戦慄 (Erleben, n.) にその最も深き根源 (Ursprung, m.) を有しているのである。

Das Unheimliche und Unbegreifliche in der Natur machte die Menschheit tiefgehend

subjektiv und aus dieser Gemütsverfassung ging die Religion hervor, welche daher in dem inneren Erleben vor den äußeren Naturgewalten ihren tiefsten Ursprung hat.

6. こんど新たに出来た (neugewonnen) 友人は、確乎たる (fest) 信念 (Zuversicht, f.) と、何物によっても撼[うご]がし (erschüttern) 難い理想主義的 (idealistisch) 思想 (Gesinnung) と、凡ゆる崇高 (erhaben) なるもの、美しきものに対する純真なる愛と、そして凡ゆるせせこましき (kleinlich) もの、穢[けが]らわしき (schmutzig) ものに対する嫌悪の念 (Ekel, m.) とを私と共に (mit) 分っている (teilen)。

Der neugewonnene Freund teilt mit mir die feste Zuversicht, die durch nichts zu erschütternde idealistische Gesinnung, die reine Liebe zu allem Erhabenen und Schönen und den Ekel vor allem Kleinlichen und Schmutzigen.

[30] 「.....の余り」という vor.

樹が多すぎて森が見えぬ。Man sieht den Wald vor Bäumen nicht.

この俚諺は。いわゆる「灯台元暗し」に似ているようで一寸ちがう。否、大変ちがう。灯台元暗しは、見えないから見ないのであるが、これは「見えていて見ない」ことを云うのである。内容も表現も此の方が上手[うわて]だろう

此の vor den Bäumen は、「樹のために」という訳語で考えてもよかろう。けれども、同じ「為め」でも、これは特殊な「為め」で、たとえば不景気のために物価が下がるといふ其の「ため」とはちがう。理由を指す点は似ているが、後者は純粹に理由又は原因を指すに止まり、前者は、その外になお「云々のあまり斯々である」「あんまり」云々すぎて斯々である」と云ったような潤色が付け加わる。故に訳語として最も此の vor を潤沢な色彩で表現するのは(それが文脈の前後にあてはまるかどうかは場合によって決まるが)「云々の余り」という形式であろう。(其の他「.....まぎれに」「.....の極み」「.....に堪えず」「過ぎて」等が此の vor の本質を明示するに適している)。

必ず無冠詞

此の vor を伴う名詞は必ず無冠詞である。此の点が前項で問題になった vor と、形式的にも相違している。つまり此の vor は、いわゆる補足語ではなく殆ど副詞の如き印象を与える「副詞句」を造るのである。

題例に用いた vor Bäumen は特殊な例をわざわざ選んで注目を惹いたのであるが、実際の慣用句としてはむしろその後に来る名詞の範囲が略々決まっているから、その中の特徴的なものを下に並べて見る。

vor Freude	悦びの余り	vor Lust	快さの余り
vor Schmerz	悲痛の余り	vor Freude	歓喜極まって
vor Entzücken	歓喜の余り	vor Not	窮した極み
vor Ärger	腹立ちまぎれに	vor Neid	羨ましきの余り
vor Langeweile	退屈の余り	vor Sehnsucht	憧憬の極み
vor Aufregung	亢奮の余り [の極み]	vor Eifersucht	嫉妬の極み
vor Wut	激怒の極み	vor Lachen	可笑しさに堪えず
vor Zorn	腹立ちまぎれに		

以上はすべて人間の主観的な状態、即ち主として心理状態を指す名詞の場所のみであるが、必ずそうでなくても好いので、vor Bäumen 等でも明瞭なる通り、どんなものにも勝手に付け得るのである。

[1] Die Gasse war schwarz vor Menschen, die ihre Weihnachtseinkäufe machten.
(街頭はクリスマスの買物をする人ごみのために真っ黒であった。)

[2] Doch konnte er *vor* den im Mondesglanze zitternden Blättern nichts genau unterscheiden.
(然し彼は月の光に顫[ふる]える木の葉のために何一つさだやかに見定めることが
できなかった)

[参考]単に動作の動機を指すに過ぎない時には *aus* を用いる。これも名詞に冠詞を省く。

aus Furcht	恐怖の念から
aus Versehen (versehentlich)	過って
aus Vorsicht	用心して
aus Liebe	愛情から
aus Überzeugung	確信から発して
aus freien Stücken	我から進んで
aus freiem Willen	(同上)
aus eigenem Antriebe	(同上)
aus sich selbst	(同上)
aus Neugier	好奇心から

例 題

1. 普通人 (Alltagsmensch) は孤独を好む人たち (Freude der Einsamkeit) を理解することができなくて、首を捻って考える (sich fragen; sich den Kopf zerbrechen) 「はて一たいどうして (aber wie.....?) あんなに一人切りで居られるなんて事が出来たもの (möglich) だろう? 私だったら、ほんの一日でも (einen einzigen Tag) 人に会わ (einen sehen) ずに暮らせと云われたら (sollen を用う) 退屈で死ん (vergehen) でしまうだろう。」

Die Alltagsmenschen können die Freude der Einsamkeit nicht begreifen und zerbrechen sich den Kopf: "Aber wie ist es möglich, dass man immer so allein sein kann? Ich werde vor Langsamkeit vergehen, wenn ich einen einzigen Tag leben sollte, ohne Leute zu sehen."

2. 彼女は彼を凡そ此の世の中の最も醜い男だと信 (einen für soundso halten) じていたのに (und doch) 彼を良人にしよう (einen zum Manne bekommen; einen heiraten) と希望 (wünschen) する女が一人現われ (es findet sich da jemand) た! 彼女は概して (im allgemeinen) 気丈夫な方で (eine beherzte Person) はあったが、これを聞くと (jetzt のみでよし) さすがに (doch) 怕 [おそ] ろしさ (Entsetzen) の余り髪の色が逆立った (einem sträubt sich das Haar, einem stehen die Haare zu Bergen)。

Sie hatte ihn für den hässlichsten Menschen von der Welt gehalten, und doch fand sich da eine, die ihn zu heiraten wünschte! Sie war im allgemeinen eine beherzte Person, aber jetzt sträubte sich ihr doch das Haar vor Entsetzen.

3. 今度来たおさんどんは元のおさんどんの様ではない、彼女は完全無欠 (vollkommen) で、悪い癖 (Laster, n.) はちっともない (frei von.....)、いわゆる (wie man sagt) 至宝 ("Perle") だ。ただ少々物好き (neugierig) すぎるだけである。お客があつたりすると、好奇心 (Neugier, Neugierde) の余りお台所にじっとして (sich wo still halten) られないという性である。

Die neue Köchin ist nicht wie die alte, sie ist vollkommen, frei von allem Laster, "eine Perle" wie man sagt. Nur ist sie etwas zu neugierig. Wenn ein Besuch da ist, kann sie sich vor Neugier nicht still in der Küche halten.

4. 此の世界恐慌の真っ只中であつて (mitten in) 一たい (eigentlich) 我々すべてがどうなつて行くのか (wie es mit einem geschieht) それを誰に確言 (mit Sicherheit sagen) できよう? 学者さん達や政治家さんたちは、いや斯うだ、いやああだ (dies und das) と仰有る (meinen) が、結局のところ (schließlich) 彼等は我々をどうすることもできないのだ (helfen

を用う)。我々はただ人々が戸惑いして (kopflös; ratlos) 右往左往し (herumlaufen)、経済上の苦境 (Elend, n.) と財政上の困難 (Not, f.) の余り去就に迷って (nicht ein noch aus wissen) いるのを見るきりである。

Wer könnte mitten in dieser Weltkrise mit Sicherheit sagen, wie es eigentlich mit uns allen geschieht? Die Herren Gelehrten und Staatsmänner meinen dies und das, aber schließlich können sie uns nicht helfen. Wir sehen nur, dass die Leute kopflös herumlaufen und vor wirtschaftlichem Elend und finanzieller Not nicht ein noch aus wissen.

5. 不慮の (unerwartet) 幸運が汝を見舞い (einem zuteil werden; über einen kommen) たる瞬間に於いては、その同じ瞬間に於いて、その事を内々 (im stillen) 快からず感じ (einem etwas übelnehmen)、妬 [ねた] みと不服 (Überdross, n.) の余りむしろ (lieber) 死せんことを希うところの多くの人間が存在することを忘れてはならぬ。

Im Augenblick, wo dir ein unerwartetes Glück zuteil geworden ist, darfst du nicht vergessen, dass in demselben Moment es eine Anzahl Menschen gibt, die es dir im stillen kolossal übelnehmen und vor Neid und Überdross lieber zu sterben wünschen.

6. 私は、私の前で砂の上を匍い廻り (herumkrabbeln)、鋏 (Schere, f.) を空中に振り廻し (mit etw. herumfucheln)、私が (meinerseits を附加する) ちょっと動いても (bei der geringsten Bewegung)、横向きの (schräge) 滑稽な (lächerlich) 急速なテンポ (Eiltempo, n.) で (in) 鋏や脚をごっちゃに動かして (mit durcheinanderfahrenden Scheren und Beinen) 彼等の穴の中へすっこんでしまう (verschwinden) 蟹 (Krebe, m.) にじっと見入っている (sich in etw. vertiefen)。手足 (Glieder, pl.) があんまりこちゃこちゃ動く (krabbeln) ので、何処までが脚で (etwas hört wo auf) 何処からが鋏だか (etwas beginnt wo) 見当がつかない (man weiß nicht)。

Ich vertiefe mich in die Krebse, die vor mir im Sande herumkrabbeln, mit den Scheren in der Luft herumfucheln und bei der geringsten Bewegung meinerseits im schrägen, lächerlichen Eiltempo mit durcheinanderfahrenden Scheren und Beinen in ihre Löcher verschwinden. Man weiß vor krabbelnden Gliedern nicht, wo die Beine aufhören und die Scheren beginnen.

[31] 認容的 mögen と können

科学は理性は満足させるかも知れぬが、気持は毫も充たさない。
Die Wissenschaft mag die Vernunft befriedigen, --- das Gemüt lässt sie leer.

「たとえ云々であるにしても」、「よしんば云々であるにせよ」、及びこれらに似た形式の意味を普通「認容」という名称で呼んでいるが、一口に認容と云っても、それには色々な場合があって、従って形式も亦一にして止まらない。

此の項で研究するのは先ず mögen または können を用いる場合の中、しかも最も普通な型だけである。

弱い認容

「そう云えば成程そうかも知れない」然し.....と云ったような場合が最も此の認容という形式に当てはまるのであるが、そう云う場合を、他のもっと強い力のこもる場合と区別して、一寸仮に弱い認容と呼んでおく。この弱い認容の場合には、普通の語順(すなわち主語を第一位に置く「正置法」)で、単に mögen または時とすると können を用いればよろしい。これらの助動詞はつまり zwar という助詞の代わりに用いると思つて差し支えない。

Die Wissenschaft mag die Vernunft befriedigen = Die Wissenschaft befriedigt zwar die Vernunft, od. Die Wissenschaft mag zwar die Vernunft befriedigen.

強い認容 (wollen) と呼応して

もう少し強い意味の認容文になると、「たとえ如何に云々であろうとも」と云ったように、「如何に」と云ったような概念が這入って来る。そうすると普通、日本語の場合には一寸余計なように思われる *wollen* の副文章を入れる。この副文章は必ず *was*, *wie*, *wo*, 其の他の疑問詞又は *soviel*, *so oft* 等を先に立てるのが例である。

1. Die Wissenschaft mag die Vernunft befriedigen, *soviel sie will*.
(科学がたとえ如何に理性を満足させようと)
2. Die Wissenschaft mag feststellen, *was sie will*.
(科学がたとえどんな事を確認しようとも)
3. Die Wissenschaft mag die Sache auslegen, *wie sie will*.
(科学がたとえ該件を如何に解釈しようとも)。

[備考] *mögen* の代わりに接続法第一式を用いてもよろしい。そうすると *wollen* の方も時とすると *wolle* 等、第一式接続法にすることがある。

1. Die Wissenschaft erforsche die Sache soweit sie will (od. *wolle*)
(科学がたとえ該件を何処まで探求しても)
2. Die Wissenschaft packe die Sache wo sie will (od. *wolle*)
(科学がたとえ此の問題をどの点で捉えようとも)

immer の用法

一寸した現象で注意を要するのは、こうした種類の文章の勢いを助けるために間に挿入する助詞である。*immer* は「とにかく」「まあ」「なるほど」「そりゃあ」と云ったような意味をもっているから、認容文に適当に挿入すれば文勢をはっきりさせる効果がある。

1. Die Wissenschaft mag *immer* forschen und sich abmühen.
(学問はまあいくらなと研究し苦心するが好い。)
2. Die Wissenschaft mag behaupten, *was sie immer will*.
(学問はまあ何とでも主張するが好い。)
3. Die Wissenschaft mag dies und das --- was für Vermutungen *immer---* als wahrscheinlich auftischen.
(学問がたとえあれやこれやの事柄を---それがたとえまあどんな憶測であれ---真に近きものとして持ち出すにせよ。)

noch so (たとえ如何に)

immer よりも強いのは *noch so* である。但し *so* の次には何か形容詞又は副詞を置く必要がある。たとえ文脈その者は認容文でなくてもできる。*noch so* を用いると、その用いた個所だけを認容的にする事ができる。

Die Wissenschaft muss sich mit *noch so* unbedeutenden Dingen beschäftigen, wenn es die Wahrheit gilt. (真理のためには、科学はたとえ如何につまらない事柄をも研究の対称にしなければならぬ)。

故に文全体が認容文であれば、*noch so* の用いられる場合が多くなるのは当然である。

1. Die Wissenschaft mag sich *noch so* vollkommen gestalten.
(学問がたとえ如何に完全なものになっても)。

2. Die Wissenschaft mag *noch so tiefe Wahrheiten* zutage fördern.

(学問がたとえ如何に深き真理を開発しても)。

認容文の次では正置を行って対照力を強める

普通は、副文章の次の主文章は、動詞の定形を先置する、所謂倒置法を用いることになっているが、認容文(及び時に **wenn** 等の仮定文)の次では二つの相反する事実のコントラストを強めるために、語調の関係からして、正置を行うことが多い。

Die Wissenschaft mag sagen, was sie will, *es gibt doch Gespenster.*

(科学がたとえ何と云ったって、幽霊はやっぱり存在するよ)。

つまり、こうなると、もはや一つの文ではなくて、ばらばらの二つの文として感じさせるのである。だから、認容文の次にはよく **Gedankenstrich** [----] が用いられる。

Die Wissenschaft mag sagen, was sie will---- *es gibt doch Gespenster.*

認容文の次では、力強き句の先置が好んで行われる

これも語勢を強めるための一つの手段である。

1. Die Wissenschaft mag sagen, was sie will, *Gespenster gibt es doch wirklich.*

2. Die Wissenschaft mag sich anstellen wie sie will, *eins kann sie nie und nimmer begreiflich machen.* (科学がたとえどんなにして掛かっても、一つ茲にどうしても科学では説明できない事柄がある。)

[備考] **mögen** を用いる形としては、なお **so groß sich auch die Wissenschaft tut** (学問がたとえどんなに威張っても)等 **so** と形容詞、副詞を用いる場合、及び **was für Theorien auch immer die Wissenschaft aufstellt** (たとえ科学がどんな説を立てようとも)と云ったような場合に、なおその上 **mögen** を用いる場合もあるが、これは省く。

können に就いて

普通は **mögen** で、**können** の場合はどちらかという稀であるから、茲では単に例を一つあげておくに止める。(俗語には **können** が多く用いられる傾向がある。)

Ick lass dir nicht, nee, ick lass dir nicht, und da kann passieren, was will.

(どうしておまえを離すものか、滅相もない、どうしておまえを離すものか、たとえどんな事があつたって。)

[備考] **nee = nein. dir = dich.** (伯林の方言)。

必ずしも俗語ばかりというのではないが、正式の文ではまず **mögen** の方が良いとして置いた方がよいと思う。

da の機能

wollen を用いる方の副文章には、ほとんど関係代名詞を強めるという以外に大してはっきりした意味のない **da** を挿入することがある。

Mag kommen, was da will. 何でもやって来い。(なるようになれ)
もっと強めると **Komme, was da mag !**

しかしこれらはもう此の項で扱ったものの域を脱して、それとは少し異なった「挑みの認容」という部類に這入るから、ここでは先ず述べないことに置く。

例題

1. 創造的(schöpferisch)天才(Genie, n.)の凡ゆる本能の動き(Triebregung)は渠[かれ]の芸術品の具体化(Gestaltwerdung)に影響を与え(etw. beeinflussen)且つ其の規定に幾分の関係を持っている(mitbestimmen)であろう。そしてこれらの経路(Wege)を採迫する(verfolgen)のが心理学的(seelenkundlich; psychologisch)芸術研究(Kunstforschung)の一つの真剣なる課題である。けれども純粹に機械的な(mechanisch)説明は、必ず、左様な唯物論的分析(Sezierung)には正体を証さ(sich jm. erschließen)ない所の一つの力(Macht)に突き衝[あた]る(auf etw. stoßen)であろう。

Alle Triebregungen eines schöpferischen Genies mögen die Gestaltwerdung seiner Kunstwerke beeinflussen und mitbestimmen, und diese Wege zu verfolgen ist eine ernste Aufgabe seelenkundlicher Kunstforschungen. Aber die rein mechanischen Erklärungen werden immer auf eine Macht stoßen, die sich dieser materialistischen Sezierung nicht erschließen.

2. 実在(Sein, n.)と思惟(Denken, n.)との関係(Verhältnis, n.)をたとえ如何に取ろう(fassen ; auffassen)とも、いずれにせよ(jedenfalls)、思惟の路(die Wege)即ち主観的關係(Verhältnisse)が実在のそれとは本質的に(wesentlich)別物であるということは、經驗的(empirisch)立場からして確実性を持って主張することが出来る。

Man mag das Verhältnis von Sein und Denken fassen, wie man will --- jedenfalls lässt sich vom empirischen Standpunkte aus mit Sicherheit behaupten, dass die Wege des Denkens, d. h. die subjektiven Verhältnisse wesentlich andere sind, als die des Seins.

3. 本当ですよ(Glauben Sie mir)、まだ今だって(immer noch)金を儲ける口(Möglichkeiten)がありますよ。不景気(Krise, f.)がたとえどんなに深刻(es steht schlimm mit etwas)だって、たとえば私のような頭の好い男(ein heller Kopf)は、其の日其の日のパンのみならず、パンにつける(dazu)バターまで儲けるすべ(Mittel und Wege)を、後から後からと(immer wieder)見つけ出しますからね。

Glauben Sie mir, es gibt immer noch Möglichkeiten, Geld zu verdienen. Mit der Krise mag es noch so schlimm stehen, wie es will, ein heller Kopf wie ich z. B. findet immer wieder Mittel und Wege, nicht nur sein tägliches Brot, sondern auch Butter dazu zu verdienen.

4. 鑄(Gießen, n.)銀には非常な(groß)経験が必要とする、即ち鑄造の際に銀は或る特殊な性質を示すのである。それはたとえばどんなに用意周到に(vorsichtig ; mit Sorgfalt)仕事に取り掛かっ(zu Werke gehen)ても、熔[と]けた状態に在っては、この金属は酸素(Sauerstoff)を多量に(in beträchtlichen Mengen)遊離せしめ(auflösen)、その酸素を冷却(Erkalten, n.)の際に多少(teilweise ; mehr oder weniger)含んでしま(zurückbehalten)い、排除(ausscheiden)された酸素は鑄物(Gussstück)を気孔だらけ(porös)にするからである。

Das Gießen von Silber erfordert große Erfahrung, beim Gießen zeigt das Silber nämlich eine besondere Eigentümlichkeit. Man mag noch so vorsichtig zu Werke gehen, in geschmolzenem Zustande löst dieses Metall Sauerstoff in beträchtlichen Mengen auf, den es beim Erkalten teilweise zurückbehält, und der ausgeschiedene Sauerstoff macht die Gussstücke porös.

5. 自動車納庫(Garage, f.)の暖房(Heizung)が惹起する(verursachen)費用の点(Kosten, pl)は問題外としても(abgesehen von.....)、そういう事は(eine solche)多くの場合実行に非常な困難が伴うものである(sich nur mit großen Schwierigkeiten durchführen lassen)。大抵の納庫は戸外(das Freie)にあり、且つ軽く建てられてあるから、どんなに温め(heizen)ても温熱(Wärme)は四散(sich in alle Winde verfliegen)してしまう

Abgesehen von den Kosten, die die Heizung der Garage verursacht, lässt sich eine solche in

vielen Fällen nur mit großen Schwierigkeiten durchführen. Die meisten Garagen stehen im Freie und sind leicht gebaut ; man kann sie heizen, soviel man will, die Wärme verfliegt sich in alle Winde.

6. 統計 (Statistik) や事態 (Tatbestand, m.) の究明 (Aufhellung) は政策 (Politik) への前提 (Voraussetzung) で、政策そのものではない。たとえ何回熱 (Temperatur, f.) を計り (messen) 脈 (Puls, m.) を取 (fühlen) っても、それによって発熱状態 (Fieberzustand, m.) を除去 (beseitigen) することはできない。

Statistik und Aufhellung des Tatbestandes sind eben Voraussetzungen zur Politik, nicht diese selbst. Man mag noch so oft die Temperatur messen und den Puls fühlen, der Fieberzustand wird dadurch nicht beseitigt.

[32] wenn auch と auch wenn

彼は私に向かって---別にそんな事をしなければならない理由も無かったに拘わらず---たとえ私の味方が挙[こぞ]って私を見捨てた際に於いてもなお私の味方たるべき事を固く誓約した。

Er hat mir --- wenn auch kein Anlass dazu vorhanden war --- hoch und heilig beteuert, zu mir zu halten, auch wenn alle meine Anhänger mich verlassen würden.

これも前項で述べた認容文に関する注意であるが、auch wenn と wenn auch との区別を誤るのは、和文独訳の際のみならず、独文和訳の際にすらもよくある間違いである。

一口に認容文と云っても、かなり沢山の種類があることは前項に於いて述べた通りであるが、此の wenn auch と auch wenn との使い分けを根本的に理解するためにも亦或種の見地から認容なる概念の区別をはっきりさせて置くことが必要である。その区別は、かなりはっきりした論理的なもので、意味のみに関するものである。

事実的認容と仮定的認容

題例に用いた文をよく研究して auch wenn と wenn auch との差が意味としてどれだけ違うかを考察すればおのずと明瞭になる筈であるが、なおもう一つの例を引いて見よう。

[A] Jede Hausfrau verleiht, auch wenn die Rezepte ganz die gleichen sind, doch ihren Speisen durch die Zubereitung einen besonderen Geschmack, welcher ihren Charakter entspricht. [G. Keller, der grüne Heinrich]

どこのお神さんでも、たとえ処方が全然同じ場合でも、やっぱり其のやり方によって自分のお料理に御自分の性格に相応しい一種独特な味を授けるものである。

上の文の auch wenn を wenn auch に変えたらどうなるだろう？

[B] Jede Hausfrau verleiht, wenn auch die Rezepte ganz die gleichen sind, doch ihren Speisen durch die Zubereitung einen besonderen Geschmack, welcher ihren Charakter entspricht.

どこのお神さんでも、勿論処方は何処でも同じとしたものだが、やはり其のやり方によって自分のお料理に御自分の性格に相応しい一種独特な味を授けるものである。

随分意味がちがって来る。即ち、前の auch wenn は、「云々.....したる際に於いてもまた」、もっと詳しく解釈を加えると、「そんなこともあるまいが、まあ仮にあるとしても」という事である。-----それに反して、後の方の、wenn auch は、「事実云々であるが」「事実云々であるに拘わらず」の意で、或る場合には während 又は wenn の事実対照的用法

と同じである。

この事実によって、認容には「仮定的認容」と「事實的認容」との二種類があることが解る。

事實的認容 *wenn auch* に就いて

wenn auch の方は、必ずしも *wenn auch* でなくてもよいので、*obgleich, obschon, obwohl, wengleich, wiewohl, obzwar*, 其の他 *ob, wenn* 又は *wie* を前半部とし、*gleich, schon, auch, wohl, zwar, selbst* のいずれかを後半部とする接続詞はすべて此の事實的認容に用いられる。(詳細は拙著、新独逸語文法教程 335 項)

また *wenn auch, ob auch, wenn schon, wie zwar* 等、一語に書かないものも、*obgleich* 等普通一語に書くものも、その間に代名詞その他の文枝を介在せしめることができる。というよりはむしろ *ob, wenn, wie* のみが本当の接続詞であって、後の部分は単なる副詞なのである。

ob ich zwar kein Fachmann bin. 私は専門家ではないけれども。

wenn ich auch dagegen bin. 僕はそれに反対なのだけれど。

obgleich 等になると、*obgleich ich dagegen bin* でも *ob ich gleich dagegen bin* でも好いわけであるが、近時のドイツ語では前者の方が普通である。

仮定的認容 *auch wenn* に就いて

auch wenn の方は、詳しく云い換えると *auch dann, wenn.....* 即ち「云々したる際と雖もなお且つ」である。*auch* の代わりに *selbst* を用いて *selbst wenn* と云っても好い。

事實的認容を仮定的認容の如くに云う事あり

斯うした論理的な区別を明らかにした後では、そういう種類の現象に対する認識眼が非常に鋭敏になるの余り、或種の異例に接するというと、それらをも自分の既に知っている区別でもって律しようとする要求が起こって来るので、そのために又一面事実が無邪気に事実として受け入れられなくなる事がままあるから、序でに異例をも一つ照会して置こう。それは、論理的に考えると明らかに「事實的認容」でなければならない筈のところ、形式としては「仮定的認容」を用いることがあると云う例である。

Ich danke Ihnen für Ihre Mitteilungen, auch wenn ich kein Gewicht darauf legen kann.

私としては別にそれらを重大視するという事はできませんが、とにかく御通知下さった事に対してはお礼を申し上げます。

理屈だけで考えると、此の *auch wenn* は、今まで述べてきたところによると、明らかに *wenn auch* でなければいけない所である。またそう云った方が元来はよかったのかも知れない。けれども、此の際は *auch wenn* と云っても別に間違いであるとは云われぬ。それは、此の文全体が一つの外交的辞令であって、外交的辞令には或種の懸け引きと云うものがある。或種の残酷な事実は、事実として露骨に云い表わさないで、婉曲に、恰もそれが一つの仮定であるかの様に云った方が好いからである。即ち「別にそれを重要視することは出来ませんが」と云うよりは、「仮にそれを重要視することが出来ない致しましても」と云った方が婉曲なのは日本語の言い廻しによっても合点が行くであろう。

[備考]以下の例題は、必ずしも今までに説明したものを全部使い分けるというのではなく、文の意味によって *auch wenn* を使うか *wenn auch* を使うかという、その見分けの練習である。

例題

1. 理想主義は斯くの如き命題 (Satz, m.) を主張 (behaupten, verfechten) する。即ち、理想的 (ideal) なるもの、否、非現実的なるものが最も価値ある (wertvoll) ものである、たとえそれが矛盾 (Widerspruch, m.) に導く際と雖もなお吾人は不可能なる事柄すらも (sogar) 要求 (fordern) しなければならない。如何となれば矛盾を怖るる者には、謂わばそれに乗って (auf III.) のみ何等かの偉大なる事柄が企 [たくら] まれ得るところの翼が予め (von vorn herein) 剪り去ら (beschneiden) れているも同然だからである。

Der Idealismus verfiicht diesen Satz : Das Ideale, ja das Unwirkliche ist das wertvollste ; man muss sogar das Unmögliche fordern, auch wenn es auf Widersprüche führt. Denn wer Widersprüche fürchtet, dem sind sozusagen von vorn herein die Flügel beschnitten, auf denen er nur etwas Großes unternehmen kann.

2. 教会は、若し全然手を拱 [こまね] いて傍觀し (müßig dasitzen, müßig zusehen)、自分自身を、余計 (überflüssig) なもの、片付けられたる (abgetan) ものとして完全に (völlig, vollständig) 傍らに押し除け (beiseite schieben) しめんことを欲しないとならば、たとえそれらが社会的経済的、或いは政治的性質 (Charakter, m) のものであるにせよ、全力を挙げて (mit aller Kraft) 戦争の原因の排除に協力 (an III. mitarbeiten) しなければならない筈である。

Die Kirche sollte, wenn sie nicht ganz müßig dasitzen und sich sogar als etwas Überflüssiges, Abgetanes vollständig beiseite schieben lassen will, mit aller Kraft an der Beseitigung der Kriegsursachen mitarbeiten, auch wenn sie sozialen, ökonomischen oder politischen Charakters sind.

3. レマルク (Remarque) の映画の禁止 (Verbot, n.) が外国に於いて見出した反響 (Echo, n.) には大いに考えさせられる (zum Nachdenken Anlass geben)。ドイツの戦争を表現 (darstellen) する一つの映画が、ドイツ人の気風 (Empfinden, n.) に副 [そ] う (entsprechen) や否やに関しては、たとえそれが如何に好意的なるもの (freundlich gesinnt) であるにせよ、外国との論争 (Diskussion) は峻拒 (ablehnen ; entschieden ablehnen) せざるを得ない。その点に関する決定は専ら (allein) 我々のなすべきこと (unsere Sache) である。

Das Echo, das das Verbot des Remarque'schen Films im Ausland gefunden hat, gibt zum Nachdenken Anlass. Wir lehnen eine Diskussion mit Ausland, auch wenn es noch so freundlich gesinnt sein mag, darüber ab, ob ein Film, der den deutschen Krieg darstellt, dem deutschen Empfinden entspricht oder nicht. Darüber zu entscheiden, ist allein unsere Sache.

4. 争い (Streitigkeiten) や議論 (Auseinandersetzungen) には、私は今後もはや関わって (sich auf etw. einlassen) いたくない。勿論色々な教示 (Wink, m) ----それが味方 (Freund) からであれ、或いは敵 (Gegner) からであれ (es sei nun.....) ----にはよく (sorgfältig) 注意 (auf IV. achten) し、それらを出来ることなら (womöglich) 私に益する如く利用することを躊 [た] めら [う] (Anstand nehmen, soundso zu tun) ものではないが。

Auf Streitigkeiten und Auseinandersetzungen kann ich mich von nun an nicht einlassen, wenn ich auch auf alle Winke, es sei nun von Freunden oder Gegnern, sorgfältig achten und sie womöglich zu meinem Vorteil zu benutzen nicht Anstand nehmen werde.

5. 汝常に真理を談 [かた] り、それを決して誇張 (übertreiben) せんと努むる (suchen) 勿 [なか] れ。誇張はむしろそれ自身の不利を招く (sich selbst Abbruch tun) のみ。汝若し常に真理を真理として談り (etw. als etw. hinstellen) それ以外に互って (darüber hinaus) 何一つ主張せんことを欲せざらば、汝の最悪の敵 (ärgster Feind) と雖も (auch) 汝の意見に改宗 (bekehren) せしめられんこと必定なり。彼たとえその事を公に (offen) 告白すること (gestehen) を欲せざるにせよ。

Sprich immer die Wahrheit und suche sie nimmer zu übertreiben. Übertreiben tut ihrer eigenen Sache Abbruch. Wenn du immer die Wahrheit als Wahrheit hinstellen und nichts darüber hinaus behaupten willst, so wird auch dein ärgster Feind zu deiner Meinung bekehrt, auch wenn er es nicht offen gestehen mag.

6. 此の不祥なる (unheilvoll) 事件 (Zwischenfall, m.) に臨んで (anlässlich II.) 国民党政府 (Kuomintang-Regierung ; Nationalregierung) は再び (wieder einmal) 凡ゆる対外的 (auswärtig) 義務 (Verpflichtung) を確実に (pünktlich) 履行する (einer Sache nachkommen) 意思を表明 (bestätigen) した。一面 (andererseits) 同政府が最近 (vor kurzem) その正反対を決議し (beschließen) たと報道されている (es verlautet) に拘わらず。

Anlässlich dieses unheilvollen Zwischenfalls hat die Kuomintang-Regierung wieder einmal ihren Willen bestätigt, pünktlich allen auswärtigen Verpflichtungen nachzukommen, wenn auch andererseits verlautet, dass sie vor kurzem das Gegenteil beschlossen hat.

[33] それが.....であれ、将[はた]又.....であれ (1)

出納係という奴は、故意にしろ過失にしろ、ちょいちょい寄せ算の間違いをするものである。

Die Buchhalter machen gelegentlich Additionsfehler, es sei nun mit Absicht oder aus Versehen.

単に「過失或いは故意で」(aus Versehen oder mit Absicht) と oder で言い表わしても大して違わないのであるが、それに特に念を入れようとすると、此の es sei[又は es sei nun].....oder.....と云う形式を用いる。謂わば「無選択な羅列」という使い方である。

es sei nun.....oder.....

es sei [nun]は、主語のないとき、即ち主として前述の aus Versehen, mit Absicht と云ったような「副詞句」或いはその他の副詞、又は一般に単なる句を無選択に並べる際に用いられる。いくら例をあげても同じであるが、感じを慣らすために少し許り色んな例を挙げて見る。

1. es sei nun auf legalem Wege oder durch andere Mittel.
(合法的手段によってであれ、それとも其の他の手段によってであれ)。
2. es sei nun in Bezug auf diesen Punkt oder sonst in anderem Zusammenhang.
(此の点に関係してか、それとも何か他の関係に就いてか)。
3. es sei nun bar oder in Ratenzahlung. (現金にしろ、それとも賦[ふ]にしろ)。
4. es sei nun gerecht oder ungerecht. (至当なりや不至当なりやは別問題として)。
5. es sei nun mit Recht oder mit Unrecht.
(間違っているか間違っていないかは別として)。

es sei は sei es でもよい。

es sei nun の代わりに sei es nun でもよろしい。これは接続法第一式の「要求を意味する話法」の使い方と一般で、結局どちらでもよいわけである。

es mag nun.....sein でもよい

接続法第一式は、話法助動詞 mögen によって表現してよいのであるから、es mag

nun.....sein 又は mag es nun.....の形を用いてもよいわけである。

Mag es nun für sich selbst sein oder für einen anderen.

それがたとえ自分自身のためであれ、それとも誰か他の人のためであれ。

es の代わりに主語を 置くことも出来る。

以上はすべて二つ以上の句を並べる場合であったが、今度は句の代わりに文を並べてもよいわけである。其の時には、この認容文全体が一つの副文章、或いは挿入文たる地位にありながら、語順は主文章と同じ正置法にする。そして、動詞の定形は、単に接続法第一式を用いてもよろしいし、或いは接続法第一式と同価値を持っている mögen を用いてもよろしい。複数の際はむしろ必ず mögen を用いるとした方がよい。

1. man wolle es mir glauben oder nicht.

(私の言を信じて頂けるかどうかは別と致しまして)。

2. er zahle nun bar oder in monatlichen Raten.

(彼が即時払いをしようとしてそれとも月賦で払おうと)。

3. Die Verantwortung mag [od. möge] nun auf mich fallen oder auf andere.

(その責任はまあ私に振り掛かろうとそれともまた他の人間に振り掛かろうとも)。

4. Die Wahlen mögen nun direkt erfolgen oder indirekt.

(選挙はまあたとえ直接に行われようとしてそれとも間接に行われようとして)。

5. Es handle sich nun um soziale oder sonstige Fragen.

(問題が社会問題であろうとそれとも其の他の問題であろうと)。

文脈への組み入れ方

さて、以上に述べたような認容句を文脈の内へ組み入れるには、その方法はすこぶる簡単で、大抵の場合はただ本文章の後へその儘附ければ好いのである。つまり、一見主文章形式を取った文章が二つ並ぶことになる。例はこの項の最初に挙げた題例について見て欲しい。時とすると、挿入文として、本文中の中途に挿[はさ]み込まれる事がある。そういう時には、挿入部の前後は、単に Komma で仕切ってもよし、また或いは----で仕切ってもよろしい。挿入文が非常に長い際には----を用いた方がわかり易くなる。

Es gibt Dinge, die man----es sei nun zum Scherz oder im Ernst----nie ungestraft erwähnen kann. 世には、たとえ冗談にしる真面目にしる、うっかり口にするとうつんでもない事になるような事柄があるものだ。

nun, immer の用法に注意せよ

es sei nun の nun の機能には特に注目を要する。これだけを訳するとすれば「まあ」と云ったような意味になるであろう。前に述べた immer とよく似ているが、immer は好んで疑問詞と共に用いられる。von welcherlei Art immer (たとえどんな種類のものであるにしる。)

[備考] 同じ意の違った形式については次項を参照。

例 題

1. 今日幾百万の人間を過激的集団(Gruppe, f.)の傀儡的(willenlos)雷同の徒(Mitläufer)と化しつつある群衆催眠(Massenhypnose, f.)に対しては、すぐに効くような(wirken)対策(Gegenmittel, n.)は無い。だから尚更(umsomehr)、或いは著述(schriftstellerische

Tätigkeit)に依ってにしる、或いは公開的講演(öffentliche Vorträge)によってにしる、概念を明らかにすること(Klärung)によって来たるべき日々の為に備え(für.....sorgen)なければならぬ(es gilt, soundso zu tun)。

Gegen die Massenhypnose, die heute Millionen zu willenlosen Mitläufern radikaler Gruppen macht, gibt es kein schnell wirkendes Gegenmittel. Umsomehr gilt es, sei es nun durch schriftstellerische Tätigkeit oder durch öffentliche Vorträge, durch eine Klärung der Begriffe für kommende Tage zu sorgen, .

2. 民主政体(Demokratie)とは何ぞやという事は、これは誰でも知っている心算でいる(glauben)。然しながら、民主政体とは何ぞやというその事(das)に関する考え方(Vorstellungen)と論じ方(Darstellungen)とは、往々にして(gelegentlich)余りに(so)荒唐無稽(ungeheuerlich, monströs)なるが故に(dass)、政治家各位の傾聴(ruhig zuhören)を得ると得ざるとに拘わらず、今なお這般[しゃはん]の事柄に関して(darüber)多少の各論を吐く(etwas Bemerkenswertes sagen)余地ありと思われる(es scheint doch möglich)。

Was Demokratie ist, das glaubt jedermann zu wissen. Aber die Vorstellungen und Darstellungen von dem, was Demokratie sei, sind gelegentlich so ungeheuerlich, dass es doch möglich scheint, darüber noch etwas Bemerkenswertes zu sagen, die Herren Politiker mögen mir ruhig zuhören oder nicht.

3. 民主政体(Demokratie)とは、その国家自体はたとえ共和国と称し、合衆国(Vereinigte Staaten)と称し、連邦(Union)と称し、或いは王国、帝国とすら(gar)称するもよし----名は事柄に無関係である(tut nichts zur Sache)----要するに支配者と被支配者との間の対立(Gegensatz, m.)と懸隔(Abstand, m.)を少なくすること(Verringerung)である。

Die Demokratie ist eine Verringerung des Gegensatzes und Abstandes zwischen den Regierenden und den Regierten, der Staat selbst heiße nun Republik, Vereinigte Staaten, Union, oder gar Königreich und Kaiserreich, der Name tut nichts zur Sache.

4. 現今の国家に於ける、支配者被支配者間の劃然たる差別(scharfe Scheidung)の撤廃(Aufhebung, Abschaffung)は、一部分既に、それ等が政治家であれ、資本家であれ、それとも文学者であれ、とにかくそれらの国家に於いて一方の階級から他方の階級への過渡(Übergang, m. Überbrückung)をなしている所の間人が少なからず(in nicht geringer Zahl)存在するという其の事によって行わ(bewirken)れるのである。

Die Aufhebung der scharfen Scheidung zwischen Regierenden und Regierten in unseren heutigen Staaten wird zum Teil schon dadurch bewirkt, dass in ihnen in nicht geringer Zahl Menschen da sind, die einen Übergang bilden von der einen Klasse zur anderen, sie mögen nun Politiker sein oder Kapitalisten oder auch Gelehrte.

5. 妖怪(Geist)というものが将[はた]して実際に存在するかどうか、私は知らない。いやそれどころか(ja, was noch mehr ist)、妖怪という言葉が将して何を意味するのかすらも(nicht einmal)私は知らない。けれども(indessen)私も自分でその言葉を度々使用し(gebrauchen)、或いは他の人たちが使用するのを聞いたとあって見れば(da)、その言葉の下に(unter)どうしても(doch)何か或物が理解されて居ねばならぬ筈である。その或物というのが幻影(Hirngespinnst, n. Trugbild, n.)であれ、それとも何か実存するものであれ。

Ich weiß nicht, ob es wirklich Geister gebe, ja was noch mehr ist, ich weiß nicht einmal, was das Wort Geist bedeute. Da ich es indessen oft selbst gebraucht oder andere habe gebrauchen hören, so muss doch etwas darunter verstanden werden, es mag nun dieses Etwas ein Hirngespinnst oder etwas Wirkliches sein.

6. 生きているという現象(Phänomen, n.)は、そんなに(so)無限に(ins Unendliche hinein) 続く(fortdauern)ものではなくて、或いは偶然(Zufall, m.)即ち何等かの病気又はその他(oder sonst)不慮の(unvorhergesehen)禍(Unfall ; Unglück)によって、或いはよく云う(wie man sagt)老衰(sich ableben)即ち自然死で死ぬ(eines natürlichen Todes sterben)ことによって(indem)一度は終わりが来るものである。

Das Phänomen Leben dauert nicht so ins Unendliche hinein fort, sondern muss einmal enden, es sei nun durch Zufälle, d. h. durch irgendeine Krankheit oder sonst einen unvorhergesehenen Unfall, oder indem man, wie man sagt, sich ablebt, d. h. natürlichen Todes stirbt.

[34] それが.....であれ、将[はた]又.....であれ (2)

紙幣は、其の額の大小を問わず、要求に応じて必ず其の額に相当する価値の金貨に交換され得なければならぬ。

Papiergelder müssen auf Verlangen gegen Goldstücke von entsprechenden Werte eingetauscht werden, *gleichvoll ob* die Summen groß *oder* klein sind.

前項に述べた様な意味の事を表現するのに、今なお一つの方法がある。それは ob.....oder....を用いる方法である。

ob.....oder.....または ob.....ob.....

たとえば「間違っていようと間違っていないと」と云ったような時に ob verfehlt oder nicht または ob mit Recht, ob mit Unrecht と云ったような形式を用いる。これは ob es verfehlt sei oder nicht, sei dahingestellt (間違っているかいらないかは仮に詮議の外とせん) と云ったような形を省略したものである。

gleichviel ob.....または einerlei ob.....

なお、甲であろうと乙であろうと「ちっとも構わぬ」「何等選ぶところがない」結局同じである」ということを具体的に表明するために、obの前に gleichviel または einerlei を附することがある。これは全然無選択な態度の場合のみに用いるのであって、文章によっては用いられないことがある。

gleichviel was, gleichviel welcher, gleichviel wie, etc.

これは序でに述べておくのであるが、以上に述べたような場合によく似た意味で、「たとえ何であろうと」「たとえどうであろうと」といったように、疑問詞を用いる場合がある。そういう場合には gleichviel (又は einerlei) と疑問詞とを用いる。

gleichviel mit welcher Waffe. 如何なる武器を以てでも構わぬ。

einerlei von welcher Seite. とにかくどちらの側からでも。

gleichviel wen. 誰をでも。

oder のみで表現する事も出来る

前後の関係を巧みに云い表わせば、単に oder のみでも事足りることがある。むしろその方が力強くなる位である。ついでに今までのを全部復習して見よう。

敵たると味方たるとを問わず

[1] es sei nun Freund oder Feind.

[2] es mag nun Freund oder Feind sein.

[3] sei es Freund, sei es Feind.

- [4] mag es Freund sein oder Feind.
- [5] ob Freund oder Feind.
- [6] ob Freund, ob Feind.
- [7] gleichviel ob Freund oder Feind.
- [8] einerlei ob Freund oder Feind.
- [9] Freund oder Feind.

主なものだけでもこれだけはあるわけである。次の練習問題は、なるべく ob を用いて貰いたい。

例 題

1. 国家は先ず第一に (zunächst) 己自身を主張せんがための権力 (Macht) である。彼は己に属する凡ての者 (Angehörige, pl.) からして服従 (Gehorsam, m.) を要求する。彼が宣する (proklamieren) ところの法律は、好悪 (gern ; ungern) の如何を問わず、とにかく守ら (halten) れなければならない。そうでなければ (sonst ; wenn das nicht der Fall ist) それは第一 (überhaupt) 国家とは云えないのである (es handelt sich um etwas を用いよ)。

Der Staat ist zunächst Macht, um sich zu behaupten. Er verlangt Gehorsam von allen seinen Angehörigen ; die Gesetze, die er proklamiert, müssen gehalten werden, ob gern oder ungern. Wenn das nicht der Fall ist, handelt es sich überhaupt nicht um einen Staat.

2. 真の自然科学者 (Naturforscher ; Naturwissenschaftler) は先ず以て驚嘆することを学ばねばならぬ。彼は、たとえば、それが生あるもの (belebt) であれ生なきもの (leblo) であれ、とにかく何か一つの動くもの (Bewegtes) が眼前に贅 [もたら] さ (vor die Augen führen) れると、泣くのをやめ (mit dem Weinen aufhören) て物珍らしげに (neugierig) 見物 (zusehen) する小児の立場に立ち帰らねばならぬ。

Der wahre Naturforscher muss erst staunen lernen. Er muss auf den Standpunkt eines Kindes zurückkehren, welches mit dem Weinen aufhört und neugierig zusieht, wenn ihm irgend ein Bewegtes, gleichviel ob leblo oder belebt, vor die Augen geführt wird.

3. 動いているにしる、また動いていないにしる、とにかく何か一つの画像を有線電信 (auf dem Drahtweg) で或いは無線で (drahtlos) 電送 (fernsenden) しようと思ったら、その画像は、御存じの通り (bekanntlich) 先ず沢山の (eine große Anzahl) 非常に小さな点に分解 (in IV. zerlegen) されなければならない。これらの点の数が大なれば大なるなるほど、即ち (also) 罫板 (Raster, m.) が細かければ細かいほど、画像はますます明確 (scharf) になるのである。

Will man ein Bild, einerlei ob bewegt oder unbewegt, auf dem Drahtweg oder drahtlos fernsenden, so muss es bekanntlich zuerst in eine große Anzahl sehr kleiner Punkte zerlegt werden. Je größer die Zahl dieser Punkte, je feiner also der Raster ist, desto mehr schärfer wird das Bild.

4. 吾人 (man) の傍らを過ぎ行く (vorübergetrieben werden) 人の顔には一人も見覚えはない。けれど、其処には何となく、まるでみんなが兄弟であるかのように、まるでみんなが同じ血で養われているかのように、何かしら彼等をも私をも、凡ての者を一貫する (durchziehen) 何物かがあった。それは即ち、それが彼等を労働へ騙 [かた] ると享樂 (Genuss, m.) へ騙る (zu III. treiben) とに拘わらず、熱に浮かされた (fiebernd) 都会の脈搏 (Pulsschlag, m.) である。

Niemanden kennt man unter den Tausenden, die an einem vorübergetrieben werden, aber etwas war da, was alle, sie und mich durchzog, als wären alle Brüder, von einem Blut genährt : der Pulsschlag der fiebernden Stadt, ob er sie nun der Arbeit oder dem Genuss entgegenführte.

5. 酒精飲料の禁止 (Alkoholprohibition) は勿論 (ja) 大変結構 (schön) だ、しかしそんなことではとても (bei weitem) 事足り (genügen) ない。我々に必要なのは (etwas tut einem not) タバコの禁止である。人間を善 (das Gute) に導かんが為には、酒精飲料禁止に付け加うるに喫烟 [きつえん] 禁止を以てしなければならない。票決 (Abstimmung) に依ろうと緊急法令に依ろうとそれは問うところでない。

Die Alkoholprohibition ist ja sehr schön, aber sie genügt bei weitem nicht. Was uns nottut, ist eine Prohibition des Tabaks. Um die Menschen zum Guten zu bringen, muss dem Alkoholverbot das Tabakverbot hinzugefügt werden, gleichviel ob durch Abstimmung oder durch Notverordnung.

6. むしろ簡単に (doch einfach) 何もかも禁じておしまいなさい。喫烟を禁じ、舞踏を禁じ、登山 (Bergsteigen, n.) を禁じ、いや抑々 (ja überhaupt) 有害 (schädlich) 無害 (harmlos) を問わず凡ゆる娯楽 (Vergnügen) を禁じておしまいなさい。そうすればあなたは人間共をば、しょっちゅうあなたの理想にしておいでになる (etwas schwebt einem vor) ような左様な「善さ」 (Güte, f.) にまで向上 (erheben, erziehen) なさったことになりましょう。

Verboten Sie doch einfach alles ; verbieten Sie das Rauchen, das Tanzen, das Bergsteigen, ja überhaupt, alles Vergnügen, ob schädlich oder harmlos ! Dann werden Sie die Menschen zu derjenigen Güte erzogen haben, die Ihnen immer vorschwebt.

[35] 有量抽象名詞は冠詞を省く

どう云う場合に冠詞を付け、どういふ場合に冠詞を省くかは、一寸概括的に述べる訳には行かない厄介な問題で、多少細かく考えて、個々の細則を数多く覚えるのが一番実用的であろう。本項はその一つである。

此の希望が彼を高め、強め、且つ彼に耐忍力を与えた。
Diese Hoffnung hob und stärkte ihn und gab ihm *Ausdauer*.

いわゆる物質名詞 (*nomen materiae*) なるものがあることは初歩の文法に属する。即ち、Kaffee, Salz, Zucker, Brot, Milch, Wasser, Schweiß, Blut, Schnee, Holz 等、要するに「量」があつて「数」はないと考えられているものを指すのであるが、それらは凡て、定冠詞をつけて *der Kaffee, das Salz* 等と云うか、それとも単に *Kaffee, Salz* 等と無冠詞の儘で用いるのが普通になっている。(ein を冠せるときは、形容詞その他の規定を持って、「.....なる種類の」といったようなことを云おうとする時に限られる。Das ist eine Milch, die wie Wasser schmeckt ! 「まるで水みみたいな味のする牛乳だなあ」等)。

こうした物質名詞なぞと云う事を云い出すのは、つまり冠詞の問題を説明するのに重要だからである。

けれども、物質名詞なぞという事を云い出すよりも、私はむしろ「有量名詞」という範疇を設けて、それを *Mensch, Hund, Buch, Baum, Haus* 等の「有数名詞」と対立せしめた方が便利ではないかと思う。そうすれば *Feuer* なんてものは、物質だか何だかわからないが、要するに *Kaffee* や、その他 *Kraft, Schmerz, Mitleid, Ordnung* 等と共に有量名詞の部類へ這入ってしまつて、冠詞の用い方は全然同じ取り扱いをしてよろしくなるのである。物質と物質でないものを分けるのは、*Rauch, Nebel* まではわかるが、*Feuer Wärme* なぞとなると、少なくとも普通人の感じでは、さて物質だか何だか、一寸わからぬ場合が起こって来る。

それよりも、冠詞の問題を片付けるのには、「量の概念」という点を主にした方が便利である。

定冠詞を付けると概念そのものを指す

たとえば **Kraft**(力)に、定冠詞を付けて、**die Kraft** と云うと、露骨に云えば、「そもそも力というもの」「力なるもの」と云ったように、つまり **Kraft** という語によって指される概念そのものを一般的に指すのである。「彼は力を持っている」というのに、**Er hat die Kraft** などと云うと、「彼は力というものを持っている」ということになるか、それとも「彼は力の方を持っている」の意になる。例えば、今ここに「力」と「頭脳」との二つが問題になっているとする、その際には勿論 **Er hat die Kraft** 「彼は力の方を持っている」と云って意味をなすであろう。

規定を伴う時には定冠詞を付ける。

これは、概念のみが主として問題になって、「量」の点が問題にならない際の話である。そういう際には定冠詞を付ける。また、**die Kraft der Rede** と云ったように二格の規定が附くとか、**der Mut zur Wahrheit** と云ったように前置詞を伴う規定句が附くとか、或いはその他関係文を以て、**Kraft** なり **Mut** なりを詳しく規定する際には、勿論その概念がはっきり「定」まるから定冠詞を付ける。これは此の種の名詞に関してのみならず、凡ゆる名詞に共通な現象である。

冠詞を付けないと或る程度の「量」を想わせる

ところが、「彼は力を持っている」というのは、それらの場合とは少し違う。これは、換言すれば、「彼は多少の力を持っている」又は「彼は或る程度の力を持っている」ということである。そもそも力なるものを持っているということではない。それ故、「あいつはかなり力があるんでね」などという時に **Er hat die Kraft** などと云っては誤りである。**Er hat Kraft** でなければいけない。

同じような例を示して見ると-----

1. **Die Mutter hat Sorge.** おっ母さんには心配がある。
2. **Er hat Vorteil davon.** 彼はそれで得をする。
3. **In seiner Haltung ist Würde.** 彼の姿勢には威厳がある。
4. **Er braucht Ruhe.** 彼は休息を必要とする。
5. **Er zeigte mir Gunst.** 彼は私に寵愛を示した。
6. **Er fühlt Mitleid mit jedem.** 彼は誰にでも同情を感ずる。
7. **Du hast scheinbar Fieber.** 君はどうも発熱しているらしいよ。
8. **In allem, was er tat, ist Ordnung.** 彼のやる事はみんなきちんとしている。
9. **So ein Schritt bringt nur Unheil.** そんな事をすると後がこわい。
10. **In seiner Stimme lag Wehmut.** 彼の声には悲哀がこもっていた。

wenig, viel を付けて見ればわかる

量の多少を考えさせるという事が此の用法の特徴であるが、それを見分けるためには

wenig, viel, wieviel, soviel, mehr, weniger 等をつけて見るとわかる。ein wenig, etwas 等をつけて見てもよろしい。量の多少を考えさせる時には ein wenig Fieber とか、etwas Mut とか、viel Gefühl とか、wenig Selbstsucht とか云ったように、格語尾をつけないのが特徴である。(einige だけは格語尾を付ける) etwas や ein wenig に格語尾を付けないことは誰でも知っているが、viel, wenig 等の際には、よく間違えそうである。此の際は、無冠詞の有量抽象名詞と並行しているから、両方を関係させて覚えて置くのが便利である。

1. Die Mutter hat viel Sorge.
2. Er hat wenig Vorteil davon.
3. In seiner Haltung ist mehr Würde, aber weniger Milde.
4. Er braucht ein wenig Ruhe.
5. Er zeigte mir etwas Gunst.

これらは、物質名詞に、たとえば Geld に Er hat viel Geld と云って Er hat vieles Geld と云わないのと同じわけである。

[備考] viel の際には、たとえば das viel Geld(その沢山のお金、そんなに沢山なお金)といったような使い方もあるが、これは特殊な場合に亘るから省く。

不定冠詞を付けると、その「質」を想わせる

無冠詞は量(Quantität)を想わせるが、反対に不定冠詞は質(Qualität)を想わせる。これは、最も純粋な有量抽象名詞、即ち複数形を欠くもの(Mut 勇気、Ernst 真面目さ、Glück 幸い、Treue 忠実、誠、Liebe 愛、Glanz 光沢、Sorgfalt 用心、Eile 急ぎ、etc.)の際には最もはっきりしている。Eine Eile と云えば、「或種の急ぎ」である。たとえば Eine Eile, die man nicht gewohnt ist(常にない急ぎ方)と云ったように。

Sorge(心配)は、複数形 Sorgen があって、一つの心配、二つの心配、また一つの心配が増えた、と云ったように「数え」られるから、eine Sorge という、「或種の心配」だか「一つの心配」だか、それだけでははっきりしない。つまり両方の場合に用いられるのである。

1. Das ist auch eine Liebe. これもまあ一つの恋というものだろう。
2. Das ist eine Treue! なんという忠実さだろう。
3. Er zeigte einen beispiellosen Mut. 彼は未曾有の勇気を示した。

有数詞の有量的使用法(冠詞を省く)

既に eine Sorge でもわかるとおり、有数詞と有量詞との間の区別は時には非常にむづかしい。けれども、或種の名詞では、それが有数詞たることがはっきりしている。たとえば Mensch, Buch などである。

ところが、こうした一目瞭然たる有数詞をすらも、少し奇抜に、有量詞として、即ち mensch を「人間らしさ」 Buch を「書物らしい点」といったような、有量抽象名詞のようにして用いることが出来る。こんな事はほんの特殊な例であるが、有量観念を冠詞なしに用いるという筋道をはっきりと掴む上には都合がよいから一寸例で示して置く。

1. In der Schwäche liegt mehr Mensch als in der Tugend.
美德によりは弱みの方により多くの「人間」がこもっている。
2. In der Vorlesung dieses Professors wittert man nur Bücher.
此の教授の講義は書物のにおいばかりする。

[備考] Bücher は複数形だから単数ならば ein Buch だろうという疑問が起こるかも知れないが、それはそうではない。単数は使わないが、使うとしたら単に Buch というべきところである。代わりに Büchergelehrsamkeit と云っても好いところで、eine

Büchergelehrsamkeit と云うと、量ではなく質が強調される。

有量抽象名詞の普通なものとはどんなものか？

定義で云うよりは、例を多く示した方が解りよからうから、よく使いそうなものを羅列して見る。

感 じ

Lust	快さ	Freude	欣び
Schmerz	悲哀	Vergnügen	娛しみ
Mitleid	同情の念	Scham	恥ずかしさ
Gefühl	感じ	Stimmung	気分

物の性質

Gewicht	重さ	Nachdruck	力
Macht	威力	Würde	威厳
Milde	やさしさ	Strenge	厳格さ
Mangel	欠陥	Fülle	充実性

対人関係に関するもの

Schutz	保護	Tadel	非難
Dank	感謝	Liebe	愛
Treue	誠実性	Einfluss	勢力
Respekt	尊敬の念	Verachtung	侮蔑

分類の方針に別に系統はない。どちらにでも這入るものが多いのは一見すればわかる。要するに、量の多寡を問題にしうる抽象名詞の範囲が如何に広いかを暗示したのみである。

下の例題は、主として冠詞をつけない場合の用法を練るためのものである。

[備考] 本項で扱った有量抽象名詞の無冠詞用法は、仏語其の他の南欧語では特殊な形式で現わしている。即ち物質名と同じように、仏語ならば *du, de la* なる冠詞をつける。つまり独逸語に直訳すれば *vom, von der* である。ドイツ語では単に *Kaffee trinken* だが仏語では *boire du café* (*vom Kaffee trinken*) であり、*Ausdauer* ならば *de la persévérance* (*von der Ausdauer*) である。

例 題

1. 代議士 (*Abgeordneter*, 形) 達の個人的利害に密接な関係のある (*etw. nahe angehen*) 或種の問題に触れる (*etwas wird berührt*) というと、常は (*sonst*) 倦怠した国会 (*Landtag*, m.) の雰囲気 (*Atmosphäre*, f.) に (*in*) 飛躍 (*Schwung*, m.) が生じ (*kommen*)、緩慢な (*träge*) 常套的な (*hergebracht*) 討議し方 (*Art der Debatten*) にも活気 (*Bewegung ; Leben*) が生じる。

In die sonst müde Atmosphäre des Landtags kommt Schwung, in die träge und hergebrachte Art der Debatten kommt Bewegung, wenn gewisse Fragen berührt werden, die die persönlichen Interessen der Abgeordneten nahe angehen. .

2. 現代の労働者達は段々とつけあがって (*immer dreistiger werden*) あっちでもこっちでも (*überall, allerorten*) 労働の減少 (*weniger* を用う) と賃金 (*Lohn*) の増加 (*mehr* を用う) を要求している。彼等の生意気さ加減 (*Überheblichkeit*) を我慢するには余程の辛抱が要る (*erfordern* を用う)。

Die Arbeiter unserer Zeit werden immer dreistiger und verlangen überall weniger Arbeit und mehr Lohn. Ihre Überheblichkeit zu ertragen, erfordert viel Geduld.

3. 私の長男はオペラ歌手 (Opernsänger) になりたいと云う。彼は自分が充分の才能 (Talent) を持っている、固く確信している (fest überzeugt sein)。また (auch と倒置) 彼は実際声を持っている。しかし芸術的な歌い方がどんなものであるかということについては (von) かれば大して気がついていない (wenig Ahnung haben) らしい。

Mein ältester Sohn will Opernsänger werden. Er ist fest überzeugt, dass er Talent genug besitze. Auch hat er wirklich Stimme, aber was ein künstliches Singen sei, davon hat er wenig Ahnung.

4. 映画の上演 (Filmvorführung) には音楽が必要である (zu etwas gehören)。別に眼が愉快地 (angenehm) 楽しませ (beschäftigen を用う) ている時には耳も亦己が満足に接し (zu seiner Rechnung kommen) たいというわけでもない (Nicht, dass.....) が、つまり (eben) 気分 (Stimmung) を起こさせる (erzeugen) というわけである。

Zu einer Filmvorführung gehört Musik. Nicht, dass auch das Ohr zu seiner Rechnung kommen will, wenn das Auge angenehm beschäftigt ist. Man will eben Stimmung erzeugen.

5. この書物の著者 (Verfasser, m.) がまだ大して人生の経験を持っていないということは明瞭である (Man sieht, dass.....)。彼の世界観の中には多くの遊戯三昧 (Spielerei) がある、いわば多くの前景 Vordergrund, m.) と少なき背景 (Hintergrund, m.) があるわけである。

Man sieht, dass der Verfasser dieses Buchs noch wenig Lebenserfahrung hat. In seiner Weltanschauung ist viel Spielerei, sozusagen mehr Vordergrund und weniger Hintergrund.

6. 戦争中は、少年少女達の頭の中ではただ大砲の轟き (Kanonendonner, m.)、号外 (Extrablatt, n.)、救恤 [きゅうじゅつ] 品 (Liebesgabe, f.) 等が走馬燈の如くに廻転 (wild durcheinander jagen, spuken) しているのみである。こうなると (da) 分母 (Nenner, m.) や分子 (Zähler, m.)、人称変化格変化なんてもものに対しては、一顧の余裕だにない (es bleibt wenig Gedanken für etw.)。

Während des Kriegs spuken in den kleinen Köpfen der Knaben und Mädchen nur Kanonendonner, Extrablätter und die Liebesgaben wild durcheinander. Da bleiben wenig Gedanken für Nenner und Zähler, für Konjunktionen und Deklinationen.

7. 一個の才人 (Talent, n.) が書く所のものの中には多くの才気 (Witz, m. Geist, m.)、多くの頭脳 (Verstand, m.)、多くの秩序 (Ordnung)、多くの明快さ (Klarheit) がある。それに反して (dagegen) 天才 (Genie, n.) が書く所のものの中には、多くの熱、多くの光、多くの情 (Herz)、多くの魂 (Seele) があるのである。

In dem, was ein Talent schreibt, ist viel Witz, viel Verstand, viel Ordnung, viel Klarheit. Dagegen ist in dem, was ein Genie schreibt, viel Wärme, viel Licht, viel Herz, viel Seele.

8. 巨大な桶 (Riesenfass, n.) を拵え (verfertigen, zusammenzimmern) ようとする桶屋 (Küfer) は場所 (Raum, m. Platz, m.) を必要とする。非常にむつかしい発明の仕事 (Erfindungsarbeit) に一身を捧げ (sich widmen) 祝福多き (segensvoll) 事柄を以て一世を幸福にせん (beglücken) とするものは時間を必要とする。

Der Küfer, der ein Riesenfass zusammenzimmern will, braucht Platz. Wer sich einer äußerst schwierigen Erfindungsarbeit widmet und die Welt mit etwas Segensvollem beglücken will, braucht Zeit.

[36] 有量物質名詞は冠詞を省く

もぐらもちが地下を掻き廻し、土を掘りかえす。
Der Maulwurf wühlt unter *der Erde* und wirft *Erde* auf.

前項の有量抽象名詞に比べると、物質名詞の方はずっと解り易い。作文の際に最も誤りやすいのは、有量的用法の場合に冠詞を省くことで、たとえば、「僕は葡萄酒を飲んだ」と云わせると、十人中の八九人までは **Ich habe den Wein getrunken** という。 **Ich habe Wein getrunken** というべきところである。如何となれば「僕は葡萄酒なる概念を飲みました」という意味ではないから。

つまり *etwas Wein*, *ein wenig Wein* という時には単に *Wein* である。その他 *Tee*, *Kaffee*, *Fleisch*, *Milch*, *Wasser*, *Butter* 等も同種である。

ein Brot

物質名詞の特徴は、量があつて数が無いという点であるから、「量る」ことは出来ても一つ二つと「数える」ことは出来ない。従つて *ein Wasser*, *zwei Wasser* などとは云われない筈である。数える場合には何か一般的な量詞が附いて、たとえば *ein Glas Wasser*, *zwei Tonnen Bier*, *drei Stück Käse* と云つたような表現をする。これは、飛行機一「台」、発動機一「基」などと、数詞の大変やかましい日本語から考えればむしろ何でもないのである。

ところが、時とすると、*ein Brot*, *ein Tuch* などと云う。*ein Stück Brot*, *ein Stück Tuch* というのと先ず荒っぽく云えば大した違いはないが、細かに云うと少しちがう。*ein Brot* の方は、割つた一方の *ein Stück Brot* とは一寸ちがうし、*ein Tuch* の方も、たとえば風呂敷のように、多少個性とはっきりした完全さがなくてはいけない。*ein Brot* は、やかましく云えば *ein Laib Brot* である。パン竈から出て来たままの、切らない全塊である。

Glas と ein Glas

語によると、物質名詞を有数名詞に用いることがある。*Glas* は硝子で、*ein Glas* はコップである。またその反対に、有数名詞を有量名詞に用いることもある。*Die Sonne* は、太陽であると同時に「陽光」であり「ひなた」である。

定冠詞をつける場合多し

既に前項で述べたから大抵わかると思うが、一寸様子の違うこともあるから、特に定冠詞の場合を述べておく。

物質名詞は必ず無冠詞と思うと大間違いで、直接に「量」の点を考えない場合、即ち「一定の量」又は「具体量」を有しない場合には定冠詞を付ける。

たとえば *Blut* を例に取れば、「血が附いているぞ」と云う際は、「いくらかの血」が附いている、即ち計って見れば一ミリグラム半とか何とか、とにかく「一定の量の血」が問題になるのであるから、*Es klebt Blut dran!* という。また「傷口から血が流れている」も *Aus der Wunde fließt Blut* である。けれども、何か恐ろしい物を見て、「体内の血が凝結する」という際は *Blut gerinnt in meinen Adern* よりも *Das Blut gerinnt in meinen Adern* の方がよろしい。この際は、どうせ体内の血全部を指すのだから、量は直接の感じに影響がない。たとえ世の中の血という血全部を総括するのではないにしても、とにかく身体の中の血の「全部」を指すのだから、全称的用法の定冠詞でよろしいのである。*Das Blut schließt ihm wie ein Springbrunnen aus dem Halse* (彼の頸から血が泉水のように吹き出る) も「若干の血」(*Blut*) よりも「体内の血全部」(*das Blut*) と考えた方が面白い。*Das Blut wallte mir in den Adern auf.* (全身の血が脈管の中で湧き躍った) は勿論のこと。*Blut wallte mir* 云々では、体内の血の極く一部分が涌いたようで、表現として甚だ貧弱になつてし

まう。

partitiv(部分的)

だから、冠詞を付けない時の、有量的用法のことを、文法の方では **partitiver Sinn** (部分的意味) と呼ぶ事もある。これはむしろ南欧諸語の場合に(前項の備考参照)ぴったりとあてはまる用語で、独逸語の方では、この語は「私はそのパンを食べた」を **ich habe vom Brot gegessen** などと云う **von** の用法の場合のみに用いて、無冠詞の場合の名称としては用いない方がよいと思う。

一般概念としては勿論定冠詞

そもそも「血という物質」等という、一般化した概念を指す時には勿論定冠詞を付ける。これは前項にも述べておいた。

以上の説明は、むしろ定冠詞を用いる場合を例外として考え、その例外の説明が長くなってしまったのであるが、独文を作る人々には、初めにも述べた如く、むしろ定冠詞を濫用しすぎる傾向の方が多と思うから、前項と同様、例題は主として有量的用法の方を練ることにする。

[備考] 物質名詞という範疇には余程注意をすべきで、日本人には一寸首肯しにくい様なことが多い。**Baumwolle**(木綿) **Seide**(絹) **Gips**(石膏) **Leder**(鞣皮[なめしかわ]) **Papier**(紙) **Sand**(砂) **Mehl**(粉) **Garn**(糸) **Draht**(針金) **Gift**(毒) **Holz**(木材)などは誰でもその物質名詞であることを容易に承認するが、**Obst**(果物) **Vieh**(家畜) **Kreide**(白墨) などになると一寸受け取れない気がするのが普通である。**Obst** は単数のままで **einige Früchte** を意味し、**Vieh** も **Haustiere**, **Rinder**, **Schafe** 等を総括し、**Kreide** は、日本人は普通学校でしか見ないが、あれは単なる土で、学校に於いてお目にかかるような円錐棒様の形が必ずしも **Kreide** の形ではないことを考えればよろしい。

例題

1. 農産物 (**landwirtschaftliche Produkte ; Agrarprodukte**) の売上高 (**Verkaufserlös, m.**) の減退 (**Rückgang**) のため、強度の (**intensiv**) 経営 (**Betrieb, m.**) を調節 (**regulieren, dämpfen**) し、肥料 (**Dünger, m.**) を節約し (**mit etw. sparen**)、今までよりも少ない (**gering**) 土地の収益 (**Bodenerträge, pl.**) で満足し (**sich mit etw. begnügen**) なければならない。

Wegen des Rückgangs des Verkaufserlöses landwirtschaftlicher Produkte muss man den intensiven Betrieb dämpfen, mit Dünger sparen und sich mit geringeren Bodenerträgen begnügen.

2. さあ (**jetzt**) お茶でも飲みましょう。牛乳もありますよ。お茶には (**dazu essen** を用う) 果物 (**Obst, n.**) も召し上がれます。黒パン (**Schwarzbrot, n.**) が好きなら、黒パンもあります。ただ少し古くて、黴 (**Schimmel, m.**) が生えています(「黴を示す」)。ああそうだ！私の良人はタバコを買うのを忘れました。

Jetzt wollen wir Tee trinken. Wir haben auch Milch. Auch Obst können wir dazu essen. Wenn Sie Schwarzbrot gern haben, so haben wir es auch. Es ist aber etwas alt und zeigt Schimmel. Ach so ! mein Mann hat vergessen, Tabak zu kaufen.

3. ぬれた (**feucht**) インキを吸取紙 (**Löschpapier, n.**) で涸[こ]かす (**trocknen**) 際には、土地の湿気 (**Bodenfeuchtigkeit**) を植物の細胞組織 (**Zellgewebe, n.**) を通って上昇 (**steigen**) させるのと同じの力、即ち毛細管引力 (**Kapillarattraktion**) を利用する (**von etwas Gebrauch machen**) わけである。

Wenn man feuchte Tinte mit Löschpapier trocknet, so macht man dabei von derselben Kraft Gebrauch, die auch die Bodenfeuchtigkeit durch die Zellgewebe der Pflanzen hochsteigen lässt, nämlich von der Kapillarattraktion.

4. 我々はみんな喉が渇いていた (Durst haben)。遂に数歩横の (seitwärts, abseits) 叢 [くさむら] (Busch, m.) の中で泉 (Quelle, f.) が呟く (murmeln) のを聞いた。我々は駆け寄った (hinzueilen, herzueilen)。到頭 (jetzt) 水が手に入った！しかも (und) その水は氷のように冷たい！

Wir hatten alle Durst. Endlich hören wir einige Schritte seitwärts in einem Busch eine Quelle murmeln. Wir eilen herzu. Jetzt haben wir Wasser ! Und das Wasser ist kalt wie Eis!

5. 構造の関係から (in konstruktiver Hinsicht) 以前は他の用材 (Stoff, m. Werkstoff, m. Material, n.) にも可能性を提供 (bieten) していたような場合にすら、現在は鋼鉄 (Stahl, m.) が用材として用いられる。

Heutzutage wird auch in den Fällen, die in konstruktiver Hinsicht früher anderen Werkstoffen noch Möglichkeit boten, Stahl als Werkstoff benutzt.

6. 建築用材としては、鉄は必ずしも (nicht immer, nicht gerade) 理想的ではない。何故というに、鉄は錆 [さび] (Rost, m.) を吹く (ansetzen)。錆びる (rosten) という化学作用 (chemischer Prozess ; chemischer Vorgang) に際しては、鉄は容積 (Umfang, m.) を増し (an **III.** zunehmen)、膨張し (schwellen, anschwellen)、鉄によって結び着け (verbinden, zusammenhalten) られている石材を長日月の中には (im Laufe der Zeit) 破裂 (sprengen) させることがある。

Als Baustoff ist das Eisen nicht gerade vorbildlich. Denn es setzt Rost an. Bei dem chemischen Vorgang des Rostens nimmt das Eisen an Umfang zu, schwillt und kann die von ihm zusammengehaltenen Steine im Laufe der Zeit sprengen.

7. 人間はみんな違っている。その特殊な外的 (äußer) 特徴 (Kennzeichen, n.) と、個性的精神的特性 (Eigenheit, Eigentümlichkeit) の外 (außer **III.**) に、彼はなお個性的な体液 (Körpersäfte, pl.)、即ち他の人間の体液と相違した (von.....verschieden) 血液、唾液 (Speichel, m.)、汗 (Schweiß, m.) を持っている。

Jeder Mensch ist anders. Außer seinen besonderen äußeren Kennzeichen und individuellen geistigen Eigenschaften hat er auch individuelle Körpersäfte : Blut, Speichel, Schweiß, die von den Körpersäften eines anderen Menschen verschieden sind.

8. 犬にかなり多量の (größere Mengen) 鬮羊 [えんよう] の脂肪 (Hammelfett, n.) を食べさせると、そうすると犬の脂肪層 (Fettablagerung) の中に、分析によって (auf analytischem Wege) 明瞭に犬の脂肪 (Hundefett) から区別しうる鬮羊の脂肪を発見 (nachweisen) することができる。

Wenn man einem Hunde größere Mengen Hammelfett zu fressen gibt, kann man dann in der Fettablagerung des Hundes Hammelfett nachweisen, das von dem Hundefett auf analytischem Wege deutlich unterschieden werden kann.

[37] 連語と冠詞の省略

船体船員に関する全責任は船長に在り。

Alle Verantwortungen für *Schiff und Mannschaft* liegt auf dem Kapitän.

冠詞を省略する場合の重要なのは、連語、又は二語一想 (Hendiadyoin) の場合である。連語というのは、例えば Stadt und Land, Wort und Tat, Tod und Leben, Leib und Seele,

Kopf und Herz, Glück und Elend, Ruhe und Einsamkeit, Kampf und Ringen と云ったように、大抵反対概念、同種概念、又は並立的な概念を密接に結びつけて、殆ど一語の如き感じを与えるものを云う。その中でも、独逸人が特に好むのは、二語一想、即ち意味の大して違わない語を二つ結びつけて、二語を以て一想を表わすものである。Einsamkeit und Ruhe, Kampf und Ringen, Sturm und Wind, groß und stark, lieblich und mild, schalten und walten, scheiden und meiden 等、名詞ばかりとは限らないが、茲で問題にするのは名詞である。

二語とは限らない。三語四語のこともある。Haus, Hof und Garten; Mensch, Tier und Pflanze; Sonne, Mond und Sterne; Hut, Stock und Mantel, etc.

連語、二語一想には冠詞を省く

こう云う連語、二語一想には、普通冠詞を省くことになっている。たとえば、「嵐の際」と云おうとする時、単に Sturm を用いれば bei einem Sturm または beim Sturm であるが、Sturm und Wind を用いれば、bei Sturm und Wind と、dem も einem も用いない。若し beim Sturm und beim Wind 又は bei einem Sturm und einem Wind などと云うとすれば、Sturm と Wind とを厳密に概念として別けて、「その二つに限って」斯々であると云ったように聞こえる。これは二語一想の場合であるから、冠詞を附けると意味を為さなくなるが、概念としてはっきり区別される連語の場合、たとえば Mensch, Tier und Pflanze 等であると、これに一々冠詞を附けると、「この三つのものに限って云々」の意になり、冠詞を省くと、多少二語一想的になって、必ずしも此の三つに限ってと云うわけではなく、Mensch, Tier und Pflanze usw. の意になる。三つを一緒に考えて、その間の概念的なはっきりした差別を認めないときに冠詞を省くと思えばよい。

格語尾を省く (Mensch, Knabe, 等)

Mensch, Tier und Pflanze に、たとえば bei を附けると bei Mensch, Tier und Pflanze と云って、Mensch の三格は Menschen であるに拘わらず-en の語尾をつけないで、謂わば一格形(詳しく云えば格のない「挙形」を用いる。)

二格、三格には冠詞を附ける

以上は、一格又は四格の際、及び最も多い前置詞を伴う際の話であるが、前置詞も何もなく、二格又は三格にしたいと思う際には、どうしても冠詞をつけないと格が曖昧になるから、この際に限って冠詞を附ける。

[1] Aber das alles darf mich nicht abhalten, dem Kampf und Ringen der Zeit, welcher ich angehöre, mein Leben hinzugeben.

然し私はそれ位のことには怖れをなして己が属する時代の闘争に一命を捧げる事を躊躇するものではない。

[2] Der große Künstler bedarf der Liebe und Zuneigung eines engeren Kreises.

大芸術家は狭い範囲の人々の温情敬愛を必要とする。

名詞の性に関して

冠詞を全然つけないならば性の点はどうでも好いが、上述の如く dem, des, der 等を附ける場合には性が問題になって来る。若し Hass und Liebe なぞが三格になったらどうするか? (Hass, m. Liebe, f.) どうしても三格にしなければ困ると云うのなら dem Hass und der Liebe とするが好いが、それでは連語としての力が幾分弱くなるから、出来ることなら此の様な際には抑々冠詞を附けなければならない様な言い廻しをする事からして避くべきである。

二格の際には von を以て言い廻すが好い。von Hass und Liebe 等。des Hasses und der

Liebe とも言えなくはない。des Hasses und Liebe はあまりよくないから避くべきである。

ドイツ語の連語癖について

連語は、決して特殊な事ではなくて、殊にドイツ語ではどの国語に於けるよりも多いのである。そう云えば、日本語でも、漢文口調には非常に多い。否二語以上の熟語の悉[ことごと]くがすべてそれだと云っても構わない。左右、前後、恐怖、混合、退却、清新、改革、等々々々。「改革」等は改も革も同じ意味の語であって、「改め」、「革[あらた]める」である。

例題

1. 大赦(Amnestie)と免罪(Straferlass, m.)との間の相違は、大赦は多少に拘わらず(mehr oder minder)範囲の広い(umfangreich)人間数に及ぼし(sich auf **IV**. erstrecken)、免罪は個人(ein einzelner)の恩赦(Begnadigung)たる点に存する(in etwas bestehen)。

Der Unterschied zwischen Amnestie und Straferlass besteht darin, dass die Amnestie sich auf eine mehr oder minder umfangreiche Anzahl von Personen erstreckt, während der Straferlass Begnadigung eines einzelnen ist.

2. 彼は、なおも弁論を進めて(im weiteren Verlauf seiner Rede)、既にこれまでの声明(Kundgebung)に於けると同様に(ähnlich wie)、内政上の(innerpolitisch)急務(Notwendigkeiten)にも触れ(auf **IV**. eingehen)、政府国民間の釈然たる(offen)明るき(klar)信頼(Vertrauen, n.)のみが真に我が国を救い得るのであって、何等かの(irgendwelcher)陰謀(Intrigen)の能くする所に非ざる旨を声明した。

Im weiteren Verlauf seiner Rede ging er, ähnlich wie schon in früheren Kundgebungen, auf die innerpolitischen Notwendigkeiten ein und erklärte, nur offenes, klares Vertrauen zwischen Volk und Regierung könne wirklich unsern Staat retten, und nicht irgendwelche Intrigen.

3. 電熱(Elektrowärme)の利用(Verwendung)、即ち電流(elektrischer Strom)を熱に変えること(Umsetzung eines Dinges in das andere)は、最近(in den letzten Jahren)家庭(Haushalt, m.)に於いても、各種営業(Gewerbe, f.)に於いても、亦工業(Industrie, f.)に於いても非常な発達を遂げた。

Die Verwendung der Elektrowärme, d. h. die Umsetzung des elektrischen Stromes in Wärme hat in den letzten Jahren in Haushalt, Gewerbe und Industrie große Fortschritte gemacht.

4. 世人は往々にして(des öfteren)、中世期(Mittelalter, n.)に於いて教会と宗教が和戦両時に斯くも決定的なる(entscheidend)役目を演じ得たと云う事に就いて奇異の感を抱く(sich über etw. wundern)。然し乍ら、暴力(Gewalt, f.)と暴政(Tyrannie, f.)のみが支配していた不幸なる時代にあつては、教会が世俗的(weltlich)な問題にも干渉し(sich in etw. einmischen)たということは万已むを得ない事(eine Notwendigkeit)だったのである。

Man wundert sich des öfteren darüber, dass im Mittelalter Kirche und Religion eine so entscheidende Rolle in Krieg und Frieden spielen konnte. Aber in den unglücklichen Zeiten, in welchen Gewalt und Tyrannie allein herrschte, war es eine Notwendigkeit, dass die Kirche sich auch in die weltlichen Angelegenheiten einmischte.

5. 学者たちには(von)必ずしも言行の一致(Übereinstimmung)を要求する(verlangen)ことは出来ない。彼等の場合にあつては(bei)つまり(eben)言説をなす(Worte machen)という事、思想を発展させるという事が行為なのである。詩人や役者の場合には此の事実がなおもはっきりする(schärfer hervortreten)。

Von den Gelehrten kann man nicht immer die Übereinstimmung von Wort und Tat verlangen. Bei ihnen bedeutet eben Worte machen und Gedanken entwickeln die Tat. Bei Dichtern und Schauspielern tritt diese Tatsache noch schärfer hervor.

6. 本当は (eigentlich) 農業 (Ackerbau, m.) も科学の発見から益 (Nutzen) を受け利 (Vorteil) を受ける (etwas aus etwas ziehen) べきものであろう (müsste)。ところが改革 (Neuerung) 革新 (Reform, f.) は、それがたとえ如何に有益 (nützlich) なものであるにしろ農夫の大部分 (der größte Teil) には信用がない (verdächtig) のである。

Eigentlich müsste auch Ackerbau Nutzen und Vorteil aus den Entdeckungen der Wissenschaft ziehen. Aber Neuerung und Reform, so nützlich sie auch sein mögen, sind dem größten Teil der Bauern verdächtig.

[38] 特に強調すると冠詞を省く

愛は排他を前提とす。 *Liebe setzt Ausschließlichkeit voraus.*

元来定冠詞又は不定冠詞を用いる可き場合でも、その概念に特に力をこめて、謂わばスローガンの (schlagwortartig) に浮かび上がらせようとする時には、特に冠詞を省くことがある。

或いは、引用的な力をこめようとする際、と云っても好い。 *Liebe setzt Ausschließlichkeit voraus* は、その語勢と力が丁度 "Liebe" setzt "Ausschließlichkeit" voraus と云ったような感じを与えるのである。或いはまた隔字体を用いるのと同様の効果があると云っても宜しい。

従って、「A は B である」と云ったような、sein 又はそれに似た kopula を用いて、概念を紹介する謂わゆる「命名文」 (Nennsatz) に於いて此の無冠詞形が比較的多く用いられる。

Mitleid ist Sünde. (Nietzsche) 同情は罪なり。

Weltgeschichte ist Weltgericht. (Hegel) 世界史は最後の裁きなり。

Arbeit ist des Bürgers Zierde. (Schiller) 労働は市民の錦なり。

複数の際に関する注意

複数の際には、一寸概念をはっきりさせて置かなければならない事がある。それは、不定冠詞を付ける場合には、別に何の理由がなくとも複数では無冠詞の儘である (ein Mann ; Männer) から、これと、今此の項で述べているものの複数の場合とを混同しないことが必要である。形式としては全然同一になるから尚更のこと。

Die Klarheit gewinnt durch Gegensätze.

明確さはコントラストによってなおも増す。

此の際の *Gegensätze* は、決して不定冠詞の場合の複数形に相当するものではない。不定冠詞の複数には必ず「量的」な意味を伴うが、意味に力を籠めて冠詞を省く際は、量の事は一切考えず、*Gegensätze* 「なるもの」と、むしろ純粹に「概念」を浮かび出させるのである。

力を籠めるか籠めないかと云う問題は、実際に臨んだ場合には、非常に微妙な判断を要するものであるから、ある一つの具体的な場合に臨んで、此の場合は果たして冠詞を付けるのか付けないのかを判断することは、時とするとかなり困難な場合がないでもない。時には結局どちらでも意味をなすことがある。けれどもその趣旨だけははっきりと理解して置く可きである。

例題

1. 近世に至るまで(bis in die Neuzeit)外科医の執刀(chirurgische Eingriffe)は戦慄すべき(schreckenerregend)手続き(Prozeduren)とされていた。幾世紀かを通じて、外科医(Chirurg ; Wundarzt)は屢々(vielfach)死刑執行吏(Scharfrichter)拷問掛(Folterknecht)と同列に見なされ(auf einer Stufe mit.....stehen)るか、それとも、悪くすると(gar)それらと同一人物なのであった(in der gleichen Person vereint sein)。

Bis in die Neuzeit waren chirurgische Eingriffe schreckenerregende Prozeduren. Durch Jahrhunderte stand der Wundarzt vielfach auf einer Stufe mit dem Scharfrichter und dem Folterknecht oder er war gar mit ihm in der gleichen Person vereint.

2. 計画経済(Planwirtschaft)なるものが要求されている。計画経済とは何か？計画経済は、勿論その内部(innerhalb II.)には無数の(unzählig)秩序整然たる(wohlgeordnet)個々の経済(Einzelwirtschaft)が存することも可能なる、経済する(wirtschaften)人間の相当大なる(größer)一範囲(Kreis, m.)の総合経済(Gesamtwirtschaft)という見地から見ての、野性的なる(wild)、混沌たる(chaotisch)、無秩序なる(ungeordnet)、計画なく意義なき経済に対立するものである(im Gegensatz zu etwas stehen)。

Planwirtschaft wird verlangt. Was ist Planwirtschaft? Planwirtschaft steht im Gegensatz zu wilder, chaotischer, ungeordneter, plan- und sinnloser Wirtschaft, natürlich vom Gesichtspunkt der Gesamtwirtschaft eines größeren Kreises wirtschaftender Menschen aus gesehen, innerhalb dessen es unzählige wohlgeordnete Einzelwirtschaften geben kann,

3. 若し人間生活に於いて、屢々用いられる(vielfach angewandt)「自己目的」(Selbstzweck, m.)という言葉で云い表わす(bezeichnen)可き何物かがあるとすれば、それは確かに宗教である。信仰(der Glaube)に於いてのみ人間は人生の真義(Sinn)と目的(Ziel)を感ずる(erfahren)のである。知識(Wissen, n.)の如きは総体(Ganzes, n.)としての霊(Seele ; Seelenleben)に取っては結局(letzthin)単に手段(Mittel, n.)であるに過ぎない。

Wenn es im Menschenleben etwas geben kann, das mit dem vielfach angewandten Worte Selbstzweck zu bezeichnen ist, so ist es gewiss die Religion. Im Glauben allein erfährt der Mensch Sinn und Ziel des Lebens. Wissen ist für die Seele als Ganzes letzthin nur Mittel.

4. 現今の大学生(Universitätsbesucher)の大部分は、殊に我が日本(bei uns in Japan)に於いては、殆ど彼らが大学に(auf)あるのは単に大都会(Großstadt)に滞在(sich aufhalten)せんがためのみであると信じたくなる(möchte)事程左様な悪い素質(Qualität, f.)を示している(aufweisen)。彼らを駆って勉学に赴かしめる(einen zu etwas treiben)所のものは恐らくは研究心(Wissensdrang)ではあるまい。

Der größte Teil der heutigen Universitätsbesucher, besonders bei uns in Japan, weist eine so schlechte Qualität auf, dass man fast glauben möchte, sie seien nur dazu auf der Universität, um sich in einer Großstadt aufzuhalten. Wissensdrang hat sie wohl nicht zum Studium getrieben.

5. 独裁政治(Diktatur, f.)や暴力政治(Gewaltherrschaft, f.)は自由を何よりも以上に(über alles)尚[たつと]ぶ(hochschätzen)人たちにとっては勿論(gewiss)何等の祝福(Segen, m.)を意味するものではない。然し乍ら、たとえ自由にとっても秩序が必須(notwendig)の前提(Voraussetzung)である。命令なき所には無秩序(Anarchie, Unordnung)が支配する。

Diktatur und Gewaltherrschaft bedeutet gewiss keinen Segen für diejenigen, die die Freiheit über alles hochschätzen, Aber Ordnung ist die notwendige Voraussetzung auch für die Freiheit. Wo kein Befehl ist, herrscht Anarchie.

6. 労働は単に務めであるのみならず、また権利である。だから尚更(umsomehr, um so +比較級)失業は我々の同時代人(Zeitgenosse, m.)にとって禍(verhängnisvoll)である。彼等は其の日のパンを稼ぎ(verdienen)たいと云うよりはむしろ(nicht so sehr.....als vielmehr.....)何でもして(in irgend etwas)己が力を示し(sich betätigen)たい、彼らが本当に(eigentlich)何が出来るかを知り(erfahren)たいのである。

Arbeit ist nicht nur Pflicht, sondern auch Recht. Umsomehr verhängnisvoller ist Arbeitslosigkeit für unsere Zeitgenossen, die nicht so sehr ihr tägliches Brot verdienen, als vielmehr, sich in irgend etwas betätigen und erfahren wollen, was sie eigentlich können.

[39] 批評、結果の副詞

似た国語を二つ同時に学ぶのはよくない。

Man lernt nicht *gut* zwei ähnliche Sprachen zu gleicher Zeit.

一般に副詞というと、我々は大抵所謂方法の副詞を想う。(時の副詞 heute, jetzt 場所の副詞 hier, dort 等はまず意味の上で大して見当が外れないから別として)。ところが、方法の副詞の如くにして然らざるものに、批評の副詞、及び結果を指す副詞とでも称す可きものがある。こういう部類に特に注意しなければならないということは、和文独訳の時に最も明瞭に現れるのであるが、或種のものとは独文和訳の際にも方法の副詞との区別が露骨に感ぜられるのである。

=weise の語尾

方法の副詞との差別が極く曖昧なのは glücklichlicherweise(幸いにも) unglücklicherweise(不幸にも) merkwürdigerweise(不思議にも) seltsamerweise(不思議にも) sonderbarerweise(不思議にも) fäschlicherweise(過って)等、-weise の語尾を有する副詞である。Er glaubt fäschlicherweise, dass.....(彼は過って.....と信じている)等の際には、幸い日本語に適当な訳語があるために何等不思議な感じを与えないが、それを反対に、fäschlicherweise を falsch と同様の方法の副詞と思い誤って「お前の書き方は間違っている」という際に Du schreibst fäschlicherweise と云ったとしたら、それは誤りであることがわかる。Du schreibst falsch でなければならない。Du schreibst fäschlicherweise.....と云えば、「お前は間違っていて.....と書く」の意になって、同じ間違いの意でも、書き方の間違いと、その書き方をこちらの意見で批評しながら云うのとでは非常な相違が生じるのである。要するに -weise に終わる副詞には、「不思議にも」等、一寸日本語の「.....にも」に相当する。その文を書く人自身の主観的判断を表現する形式の副詞が多いのである。

勿論 -weise の語尾が必ず主観的批評的な意味になるというのではない。たとえば kreuzweise(十字形に) reihenweise(順々に) stückweise(一個ずつ)等、全然方法の副詞に属するものも多く、またそれが -weise の原意でもある。

また或る場合には、方法の副詞として用いられると同時に、一方また批評の副詞として用いられるものもある。そういう際には、「批評的」又は「主観的」と云う意味が判然として、方法の副詞とは絶対に混同を許さないものであることが尚更よくわかるのである。一例として beispielsweise を取って見るが好い。

Er schreibt beispielsweise so :

beispielsweise を主観的に解すれば zum Beispiel と同意になって「たとえば彼は斯う書いている」の意になるが、それを反対に客観的に、即ち方法の副詞と解すると、「彼は一例として次のようなことを書いている」の意になる。前の場合には、此の文章を書いた人が一例をあげんとしているのであり、後の場合は、文中の人物 er が一例をあげて

次の如く書いているのである。(主観的というのは筆者の方を指し、客観的というのは文中の人物等を指すのである。)

mit Recht 等

前例の fäschlicherweise と殆ど同意のものに mit Unrecht というのがある。(Er glaubt mit Unrecht, dass.....彼が云々と信じているのは誤りである)その反対は mit Recht である。此の二つばかりでなく、一たい mit を用いて類似の批評の副詞を作ることが多い。たとえば Man kann mit Gewissheit sagen, dass.....は「云々と確言することができる」というとまるで方法の副詞のようであるが、その意は実は批評の副詞である。Man kann mit Sicherheit [mit Wahrscheinlichkeit] annehmen(云々と推断するも過たざるべし)等になれば段々明瞭になるであろう。その他 mit Glück, mit Erfolg(首尾よく) mit Grund(.....するも故なきに非ず) mit gutem Fuge(.....するも毫も差し支えなし) mit Genugung(.....するを欣快とす)等、これだけ聞くと一寸要領を得ないかも知れないが、実際に用いてみると、各々主観的な批評又は或る動作の結果として起こる感じ其の他を表現する意味に於いて、方法の副詞とは全然違う事がわかってくるにちがいない。

[1] 日本の遊泳術が世界の孰れの国にも劣らざるものなることを確信するは吾人の欣快とする所である。

Wir stellen mit Genugung fest, dass die japanische Schwimmkunst es mit jedem Lande der Welt aufzunehmen imstande ist.

[2] ドイツをビールの国というが、それには確かに根拠がある。
Man sagt mit gutem Grund, Deutschland sei das Land des Biers.

[3] 彼は非常な大金を稼ごうと思った結果、遂に家屋敷を人手に渡してしまった。
Er nahm sich vor, ein großes Geschäft zu machen, mit dem Ergebnis, dass er von Haus und Hof vertrieben wurde.

zum Glück 等

主として結果を指す副詞で、(結果と批評とを厳密に区別することは困難で、またその必要もない際が多い)-weise の語尾と同じものに zu という前置詞がある。glücklicherweise の代わりに zum Glück, unglücklicherweise の代わりに zum Unglück, beispielsweise の代わりに zum Beispiel と云う。-weise の語尾とは違って、物主形容詞を入れて、かなり複雑なことを一句で云うことができる。

zu meinem Glück	私に取って幸いな事には
zu seiner Freude	彼に取って嬉しい事には
zu meinem Bedauern	私に取って残念な事には
zu ihrem Verdross	彼女に取って腹立たしい事には

これらの zu を伴う句は、うっかりすると「目的」を指す句と混同し易いものである。

[1] 円価が今なおどんと下って行くのは吾人の寒心に堪えざるところである。
Zu unserer großen Betrübnis sinkt das Yen immer mehr in seinem Werte.

[2] 相手が狂人だとわかったので僕は少なからず愕いた。
Zu meiner nicht geringen Überraschung musste ich sehen, dass ich es mit einem Wahnwitzigen zu tun hatte.

[3] あいつが、長らく逗留するつもりですっかりお神酒を据えたときには全くいやになっちゃった。

Er richtete sich zu meinem Verdruss auf recht langes Bleiben ein.

gut, besser, am besten その他

結果と批評とは時には一寸区別し難いと云ったが、gut, sogut, ebensogut, besser, am besten(其の他 am.....sten の形式、たとえば am schicklichsten, am zweckmäßigsten, am anständigsten, etc.)等、真に批判的な副詞がある。

[1] あなたは此の路をお行きになった方がお宜しいでしょう。
(Sie gingen besser diesen Weg ; Sie würden besser diesen Weg einschlagen ;
Sie verfolgen besser diesen Weg ; Sie täten [tun] besser, diesen Weg zu nehmen ;
Sie würden [werden] besser tun, wenn Sie da hinaus gehen etc.)

[2] そんなことは、むしろいっそやらないのが一番賢明である。
(Am besten tut man das nicht ; Man lässt das am klügsten bleiben ;
Am zweckmäßigsten unterlässt man das.)

例 題 ä ö ü ß Ä Ö Ü

1. 英国の全権一行 (Delegation, f.) が何名位 (wie groß) になるかはまだ最終的に (endgültig) 決定している (feststehen) わけではないが、両全権 (Bevollmächtiger, 形。Vertreter) が単に各々 (je) 一名ずつの随伴員 (Attaché, m.) を随行せしめる (sich von einem begleiten lassen) (würde) のが最も適当 (zweckmäßig) であるという見解 (Auffassung, f.) が荐 (しき) りに (vielfach) 発表 (äußern) されている。

Es steht noch nicht endgültig fest, wie groß die englische Delegation sein wird, aber vielfach wird die Auffassung geäußert, dass am zweckmäßigsten die beiden Vertreter sich nur von je einem Attaché begleiten lassen würden.

2. 吾人は大衆 (der große Haufen) の愚行 (Torheiten) と欠陥 (Gebrechen) が一切合切 (samt und sonders) 憎むべきもの (hassenswert) としてではなく、むしろ滑稽なもの (lächerlich) と見える (vorkommen) ように (dahin, dass.....) 心懸け (sich bestreben) ねばならぬ。そして、此の点に関しては (hierin) 泣く哲学者ヘラクリトス (Heraklit) よりはむしろ笑う哲学者デモクリトス (Demokrit) をお手本にした (einem zum Muster [od. Vorbild] nehmen) 方がよい。

Wir müssen uns dahin bestreben, dass uns die Torheiten und Gebrechen des großen Haufens samt und sonders nicht hassenswert, sondern lächerlich vorkommen ; und wir werden besser tun, wenn wir uns hierin Demokrit, den lachenden Philosophen, als Heraklit, den weinenden, zum Muster nehmen.

3. 将来に関しては何等はっきりしたこと (Bestimmtes) を言明 (sussagen) しようとしてはならない。しかし、智利 (Chile) に於いて起こった (sich ereignen) ことがらば、全南米 (ganz Südamerika) に於ける類似の (ähnlich) 発展 (Entwicklungen, pl.) の序曲 (Vorspiel, n.) であるかも知れぬと云う事だけは少なくとも相当の確からしさを以て推定 (annehmen) され得る (sichlassen)。

Man darf nichts Bestimmtes über die Zukunft aussagen wollen. Aber wenigstens lässt es sich mit Wahrscheinlichkeit annehmen, dass, was sich in Chile ereignet hat, das Vorspiel ähnlicher Entwicklungen in ganz Südamerika sein kann.

4. 一部の人士は (einige)、目下の (gegenwärtig) 経済危機が、従来の (vorhergegangen) それと同様、生産 (Produktion) を消費 (Verbrauch, m.) に向かって再び適応せしむること

(Wiederanpassung einer Sache an eine andere)によって解決(lösen)されるであろうと主張する。けれどもまた、それが消費を生産に適合せしめることによって解決し得ると主張してもよいわけだ(ebensogut)。

Einige behaupten, dass die gegenwärtige Wirtschaftskrise, wie die vorhergegangenen, durch eine Wiederanpassung der Produktion an den Verbrauch gelöst werden wird. Man könnte auch ebensogut behaupten, dass sie sich durch eine Wiederanpassung des Verbrauchs an die Produktion lösen lasse.

5. 僕の今の(jetzig)就職口(Stellung, f.)はどうも気に入らない(es gefällt mir nicht recht in.....)。僕のすることは何でも僕の上役(Vorgesetzter, 形)に気に入ら(einem recht sein)ないし、渠が僕に向かって云うことは悉く蟲が好かぬ(einem zuwider sein)。僕はなる可く早く飛び出したいのだ(möchte fort)。

Es gefällt mir nicht recht in meiner jetzigen Stellung. Alles, was ich tue, ist meinem Vorgesetzten nicht recht und alles, was er mir sagt, ist mir zuwider. Ich möchte je eher je lieber fort.

6. 自然は復讐する(sich rächen)と云うが至言である。それはつまり(das will sagen)、自他共に害を与え(einem schaden ; einem Schaden zufügen)ることなしには物事の自然なる秩序に反して何一つ企む(unternehmen)ことは出来ないということである。誰一人として祟[たた]りなく(ungestraft)己れ自身の本姓(Natur)に反して振る舞う(handeln)ことはできない。

Man sagt mit Recht, die Natur räche sich. Das will sagen, dass man nichts gegen die natürliche Ordnung der Dinge unternehmen kann, ohne sich selbst und den andern zu schaden. Ungestraft handelt auch keiner gegen seine eigene Natur.